

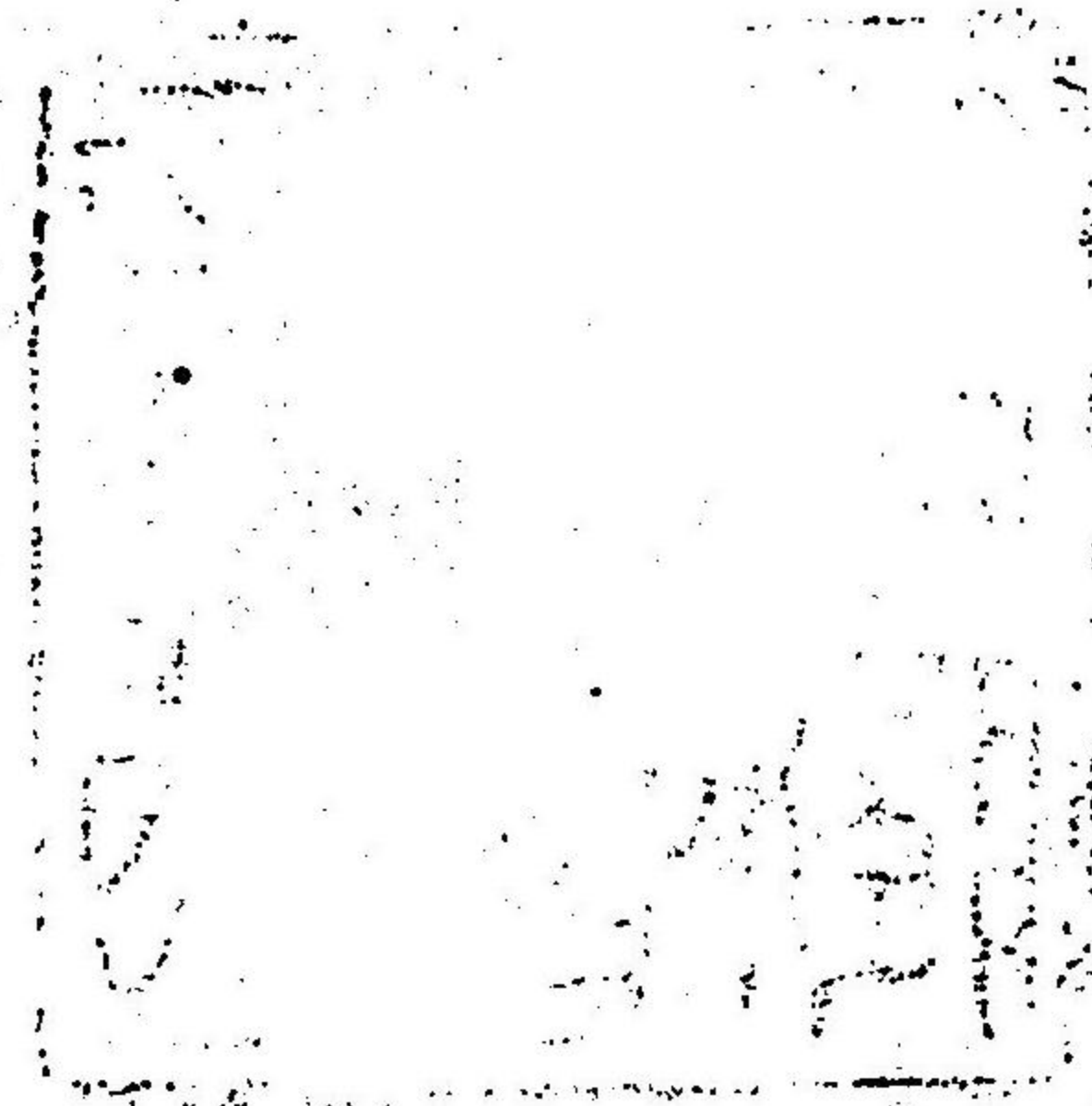
持11  
586



毒

著鳥白宗正

45. 6. 21  
内交



「明日午後晴雨に關らず、是非も訪ね申べく候につき、御在宅なさるやう願上候と云々、湯原からの手紙を見ると、香取元一は眉を蹙めた。静かな沼の水に小石一つ投込まれたやうな気がした。

春の末頃から幽鬱症が、夏になつて激しくなつてゐたので、彼れは暫らく懇意な人との往來も絶ち、行馴れた所へも足踏みせず、能ふ限り人を避けて、自分の部屋を修道院のやうにして、心を落着けやうとしてゐたが、この手紙一つでそれが最早破れさうに見えた。其處の明るい障子に醜い人影、煩い世の影が差したやうに思はれた。

が、その人を避ける譯には行かなかつた。て、「お待ち申してゐます」と、

折返して返事を認めたが、ふと思付いて、「私の部屋は取散らしてゐますか  
ら、近所の××軒へも出て下さい。正午過ぎに行つてお待ち申してゐます」  
と、書直した。

彼ははせめて自分の部屋だけは今暫らく濁したくなかつた。蜘蛛の巣や  
鼠の糞で汚されやうとも、繁吹に窓を濡されやうとも構はないが、人臭い  
息で汚したくはなかつた。

深夜に目醒めると、幾多の鼠が壁を攀ち障子を動かし、鋭い聲を立て、  
ゐる。彼は見えぬ鼠の姿を暗闇の中に描きながら、見えぬ知人の姿を心  
に浮べる。荒寺に遁籠つた弱武者が經て來た事を思出すやうに思出して見  
る。と、枕近くキ、ツと鳴聲立て、驅けて來る鼠の足音に驚かされるやう  
に、深く知合つてゐた或男や或女の不気味な素振や言葉が、突如に其處へ  
生々と現はれて心を驚かすこともあつた。

今その人達は何處に寝て、どんな夢を見てゐるだらう。何を企らんでゐ  
るだらう？

彼れは身に染みる夜の淋しさ不気味さに慄いて、明るい光に包まれた人  
の笑顔が慕はしかつたが、さて誰れに會たいと云ふ當てはなかつた。分  
てなく交つて、可成りの執著をも持つてゐた男や女も、この頃の夜の思出  
には、只色の褪せた興のない單調な姿となつて現はれて、何故あんなに執  
著してゐたのかと怪まれるやうになつてゐた。そして、そんな人達に接し  
てゐたいめ 自分の目も鼻も皮膚も、疲らされ荒らされて、心の艶を失ふ  
やうになつたのだと思はれた。

彼れは今までの生活の忌はしくもあり、堪へがたくもなると共に、僅か  
な報酬のために忙しかつた職業をも不意に止めてしまつた。自分の者とし  
て親から授けられた少しの財産は略々使ひつくしてはゐるもの、半年や

一年は遊んでゐても餓死をしさうではない。て、それ一つを手頼りなき世の手頼りとして、心も身體も休ませて、再び新しい力の湧いて来るのを待つてゐた。

折々は新しい書物をも讀んだ。子供の時分温い縁側で夢心で物語を讀耽つてゐたやうに、朝日の流れ込む畳の上で、珍らしい書物を開いて見た。散歩するにも、人通りの少ない静かな町を撰んだ。屢々程近い郊外へ出て、木蔭に憩ふたり、大根島や田の畦を矢鱈に歩いたりして、都會の中の人との關係をつとめて頭から拭去らうとすることもあつた。

(4)

日を重ねるにつれて、彼れは佗しさの餘りに、竊かに下町の雑香場へも出て行つた。芝居や寄席をも覗いて見た。しかし、咎人でもあるやうに、知人には近づかず、その目を避けるやうにしてゐた。下女とも浮世斬一つ

するてはなく、家の中は何時も寂としてゐた。

彼れは或夜ふとこんなことを思つた。これで二年も三年も何處へも出勤せず、知人の家へも顔出ししないでゐたならば、これまでの香取元一に對する世の人の好悪の念は自から薄らいて、自分の名さへも忘られるかも知れない。忘られた自分は新に生れた人となつて、二十幾年の間付纏はれてゐた香取と云ふ名に累はされないて、自由自在の心のまゝの生活が出来るかも知れない。顔へつきたいやうに懐しい新しい世界が其處に現はれて来るかも知れぬ。

(5)

さう思ふと、先祖代々の香取と云ふ名が堪へがたい程憎くなつた。この名を包んださまざまの記憶が忌はしくなつた。

たとへ人間に符牒が必要であつても、一つの名を名乗り通して、窮屈な思ひをしなくてもよい。祖父や父の忌はしい所行や、自分自身の愚かな陳腐な

所行を聯想させるやうな香取と云ふ名を棄て、新しい名をつけて見たい。彼れは晴々しい顔立の女の紅い唇から異つた名によつて自分を呼ばれたかつた。晴々しい顔立をした男の口から異つた名によつて自分を呼ばれたかつた。

「IとかSとかの褪せた唇から出る「香取さん」と云ふ聲は、最早血を湧立たす力を失つてゐる。」

だが、湯原の手紙は稍々薄らぎかけた過去を意地悪く呼び起させた。その見苦しい失策や、淺間しい行爲や、多くの知人には知られぬとまでも、湯原の頭には鮮かに刻まれてゐる。脇の下の痣でも腰の腫物の痕でも、彼の目には残つてゐる。

て、香取はその手紙を見ながら、自分が古い衣服を脱ぎ棄てやうとする場合の一番の強い邪魔物は、彼れ湯原であるやうに思つた。たとへ、自分

が聖人君子に豹變しようとも、天一坊に早變りしようとも、昔の汚れ衣を突付けて、化の皮を剥がうとするのは、彼れ湯原であると思はれた。どんなに異つた装ひを凝しても、彼は一目で自分を見現はすことが出来る。

「元一君、あの時はかうだつたねえ」と、彼れが鈍い聲で何氣なく云ふことも、嚇されるやうに聞えて、身が縮こまることもあつた。

腹の中に悪意のない、むしろお人よしと云つていゝ男だと思ひながら、香取の目には自分の心を曇らす者のやうに見えた。て、久しくその家へは近づかないでゐたのだが、どんな用事があつて、わざわざ訪ねて来るのだらう？。暫く誰れからも浮世断を聞かされず、自分の口も啞のやうに堅く噤まれてゐたものを。

隠れ家の扉は湯原の手で開かれたくはなかつた。

香取は翌日久振りて、X X 軒の階子段を上つた。

其處の二階は午後の濁つた日光を眞向に受けて、眩いほど明るかつた。疊の上に置かれた低いテーブルの白布には所々黄ろい班點があつた。

彼れは乾いた口を一杯の苦い珈琲で濕して、そのテーブルに頬杖ついて、湯原を待つ間の怠屈醒ましに、持つて來た書物を開いた。左程心を惹かれてもなく、只白い滑な紙に浮上つた鮮明な文字を、目先に送らせてゐるのに過なかつたが、ふと、あるページに目が留まつた。心を籠めて同じ所を讀返した。そして、文字の間の人影を濃く心に浮べやうとした。

その人はヴェニスの貴婦人だつた。類稀なる美人だつた。或時自分の身を古の名代いしへの女神めがみの彫像てうざうのやうに、美しい甲冑かこうで装ひ、その姿をある名畫

工こうに描かかせた。若い美しい盛りさかりに、かうして永久えいきうに自分の姿を世よに留めて置いて、花はなの色いろの褪あせるに先まじて、人ひとの目めから身みを隠かくしてしまつた。一度いちどにてもその面影おもかげに接せつした者ものに、些ちしの衰おとろへた様さまをも見みせたくはなかつた。で、いよいよ今日けふを最後さいごと自分じぶんで定さだめた日には、華美くわびを極きまめた離別りべつの宴えんを張つて、扮装えんぱうを凝こらして其處そこへ現あらはれ、その翌日よくじつから、二三にさんの召使めしつかひを連れ、壁かべを廻めぐらした庭園ていえんの中なかの静しづかな家いえに蟄居ちつきよした。そして、幾年いくねんも絶たえて人に會あふことなく、只一人ただひとりで静しづかに一生しやうの終はるのを待まちつてゐた。家うちの内うちにはどの部屋へやにも鏡かがみを置おくことを許ゆるさないで、次第しだいに自分じぶんで自分じぶんの顔かほをさへ忘わすれるやうになつた。親兄弟おやあひだちでも友人ともでも一歩いっぽも此處ここの門かどを潜ひそむことを許ゆるされな

世よの人ひとにはこの貴婦人きふじんは昔むかしの物語ものがたりの美女びよのやうに思おもはれ出だした。朽葉くちはの散ちつた濕しめつた狭せまい道みちに立たつて階上かいらうを見上みあげると、左右さゆうの窓まどは皆鎖みなとされ扉とびらは

釘付けにされてゐる。只一つ婢僕の通ふ路のみ残されて、其處から生きた死人への食物が運ばれてゐる。――

香取は永久に美しく生さんとする人間の可憐しい望みを思つた。永久に世の人に讚美されたい強い慾望を其處に見た。その貴婦人は鎖されたる窓の中で、何を思ひ何を描いて、最終の日を待つてゐるだらう。幽かに洩れて來る戸外の馬車の音や人の騒ぎを聞いて、何を感じてゐるだらう。隙間を渡る温かい光を見ても、庭の木の間に囀る雀の聲を聞いても、些しも心を動かさないてゐられるだらうか。籠の中に蓄へられて日數を経てゐる林檎が、昔の艶の失せて、日に／＼萎びても、自から悲まぬやうに、窓の中の女も次第に衰へる自分を、平氣で見えてゐられるだらうか。

“Prisoner of Time” 書物の上の濃い黒い文字が、強く彼れの目に映つた。何處かで見たとのことのある鎌を手にした西洋の神の姿が、ぼんやり思出

された。その貴婦人の窓の側には、時の神が鎌を磨澄して待つてゐる。：彼れは心の中でそんな繪をつくつてゐたが、やがて、書物を閉ぢて、目を上げて煙草を吸ひ出した。壁に掛つてゐる卑しい裸體の寫眞版――あの醜い姿を露出しにして耻づる氣もない女の繪を見るときもなく見てゐたが、すると、ふと、自分の目で見たとある實在の女の姿が記憶から浮出た。その繪の女やあの物語の女とは色が違つて、生々しく實感を動かすやうに浮んだ。

それは盲目の女だつた。

ある名高い會社の重役の一人娘で、背丈がすらりとして、色が白くて目鼻立が鮮かて、多人數の中へ出ては際立つて目に付く女だつた。金持の娘らしく贅澤に育つてゐたが、學課の出來榮も人並勝れたほどだつた。所が

十八の春一夜の中に、二つの目が一度に物を見る力を失つた。父親の悪疾を受けてゐたためだとかで、名醫に診せても何の甲斐もなかつた。

「従妹の縁談を聞いて焦れてく、仕様がなってますよ」と、焦れ出すと、いゝ着物でも何でも引裂くんですよ」と、それを見て来た人から聞いたことがある。

白く揃つた前歯を袖口に當て、ビリビリと嚙裂くさうだ。側に仕へてゐる者も、稍ともすれば、端ない女らしくない舉動に愛相を盡かせて、お傷はしいと思ふ心も無くなるさうだ。

が、その娘も心が落着いて機嫌がよくて、顔に淋しい微笑を浮べることがある。そんな日にはどうかすると新橋へ行つて見たいと云出す。て、自ら進んで髪を結つて入浴して、家中の者に助けられて盛装して、ダイヤの指環や金鏈を燦めかして馬車に乗る。迂回して日本橋から大通を、周囲の

物音に耳を留めながら、停車場まで勇ましく駆けつけさせる。そして付添の女に手を引かれながら、待合室へ入つたり、ブラットホームに立てゐたりして、悦しさに時を過ごすことがある。

何が楽しいと云つて、その娘にはお粧飾して人中へ出るくらの楽しいこととはなさうだと云はれてゐる。

せめては大勢の人に見られたさに、停車場まで出掛けて行く。「色氣づいてるから困るんですよ」と、噂を傳へた女が付足した。

「ちや、早く婿を取つてやつたらいいせう。金持だから幾らでも候補者があるてせう」と、彼れが答へると、

「でも、誰れてもと云ふ譯には行きませんからね」

「盲人にても男振のよし悪しが分るてせうか」

「さあ、周囲の者の話で感付くてせうね」



「あんな美しい盲人は盲人たるが故に、却つて一種の興味がある。……だ  
けど、情が深過ぎて弱るてせうね」  
彼れは座輿のやうに何氣なく話した言葉を思出した。そして、今思ふと、  
その不具の女に對して、眞面目に心を寄せられさうな氣分になるのを覺えた。  
世の人の思出にのみ美しい影を残して、戸鎖れた窓の中に生きながらの木  
伊乃となつてゐる貴婦人の冷たい頬よりも、人嗅い息と埃と油煙の間に、  
自分の醜い眼を曝してゐる女の燃ゆるやうな温い唇の方が慕しくなつた。  
て、彼れはその盲目の女を今一度見たいやうな氣がした。

(14)

(三)

食事時を外れてゐるので、客の出入はなかつた。家の中は寂としてゐる。

雀が窓近く来て頻りに囁つたり、羽音を立てたりしてゐたが、それが不  
のやうに單調な囁しい聲ではなくて、静まりかける彼れの空想を揺動かし  
た。一羽は影を映して軒先を飛んで行つた。日光は次第に障子の下へ沈ん  
で、黄ばんだ弱い色を映した。

香取は約束の時の餘程過ぎてゐるのに、待人の來もせねば、違約の通知  
をも齎らさぬのを、さして待遠しがりもせず、不平にも思はず、只快く  
静かに暮れて行く秋の日を、茫然見てゐた。このまゝで湯原が來なければ  
いゝやうな氣がした。その煩はしい言葉を聞かされなければと思はれた。  
今少しして日光が窓を離れたら、一人て食事をして此處を出て行かうと決  
めてゐたが、やがて、階子段に足音がした。穩かな部屋の空氣を搔亂すやう  
に慌だしい音を立て、上つて來た。香取は夢から醒たやうに心を取直した。  
「非常に遅れて濟まなかつた、和泉町で話が面倒になつたから」と、湯原は

(15)

息をばづませてテーブルの側に胡坐を掻いて、洋服の上衣を脱ぎながら、  
「急いだから暑い、今年は暑さが長かつたね」と云つて、部屋を見廻し「君は  
よく此處へ来るんかね」

言葉付も慌だしかつた。ポケットから「ゴールデンバット」を出して、  
爪の延びた指で吸口を箆めて火を点けた。臭い匂ひが青い煙につれてその  
口から流れ出た。

香取は一度この煙草の悪毒い刺激に酔つてからは、その臭氣を嗅いても  
逆付ささうな氣持になる。で、自から煙を避けるやうにして後退りして、  
障子を開けた。早稻田の森の方まで鮮かに見渡された。窓の下では少女が  
麵麩屑を入れた籠を持つて、茫然往來を眺めてゐる。

「何か食へますか」と云つて、香取は窓から首を出してその少女を呼んだ。  
そして湯原が今にも言出しさうな要談の一刻でも、延びるのを望んでゐた。

(16)

が、湯原は素振の忙しさうなのに似合はず、直ぐには用向きを口にしない  
で、この頃の世間の出来事を話したり、相手の近状を訊いたりした。

「僕はこの頃は新聞も読んでゐないんです、家に居るか、この近所を散歩  
するか、その外滅多に人にも會ひません。出来れば今年一杯かうして、何  
もしないで暮したいと思ひます」と、香取は沈んだ聲で云つた。

「君も可成り忙しい思ひをしてゐたんだから、今年中ぐらゐ遊んで、もい  
いさ。それだけの餘裕があるのは、僕等に比べて君は仕合せだよ。僕はこれ  
で二十歳の時から自分の腕で飯を食つて来たんだが三十五の今日まで、只  
の十日だつて氣儘に遊んでたことはないからねえ。今年はせめて一晩泊り  
でもいゝから、君達と一緒に紅葉を見に田舎へ行つたらと思ふんだが、そ  
れも一寸六ヶ敷さうだ」

池田に住んで大阪の郵便局へ通つてゐた時分には、休暇毎に箕面へ遊び

(17)

に出掛けたと、その溪間の紅葉の美しさを話出したが、香取は湯原の顔のあの時分と少しも違はぬことを思つてゐた。初めて下谷の下宿で會つた十年前に比べてもさしたる相違が見えぬやうだ。浮世の塵を浴びて來てゐながら、その濃い眉と黄ばんだ細い眼と脂切つた無神経らしい肥つた頬とは時の腐蝕を受けてゐない。

「君は病氣と云ふ者を知らないでせう」

香取はやがて前に置かれた麵麩を裂きながら羨ましそうに相手を見上げて訊いた。

「どうでもないね、これで生身だから」と、湯原は肌 of 寒さを感じて上衣を著て、「僕もこの頃はどうかすると頭の痛むことがあるんだよ。身體の調子が少し狂つて來たらしい」と、眉を蹙めて首を捻つた。

「君でもどうですか、憎いほど頑健に見えるけど」

「まだ弱つちやならんのだが。これから仕事をしよつてんだから」

湯原はさう云つて目を据ゑて、様子を索るやうに香取の顔を見て、「そこで君に一つ難題を持出すんだがね」と、微笑しながら言難さうに云つた。

香取は目を上げて黙つてゐた。二三月世の煩い關係を離れてゐたのが、その男の一言で無慙にも破れてしまひさうに思はれた。まだ言出さぬ先から、その厚い唇や黄ろく濁つた白目や、臭い煙草の息が、言はるべき用事の内容を前觸れしてゐた。

て、煩いこと慵いことの自分の身に振掛るのを待つてゐると、

「外でもないがね、お多代の一件だがね」と、湯原は軽く切出した。「あれを當分君の家に預つて貰えんだらうか。なに、ほんの一寸の間でいゝんだがね……食料ぐらゐ僕の方から出していい。君の家にも汚れ者が溜つてゐたらうから、その始末でもさすつもりで、少しの間置いて呉れんだらうか」

「え」と、香取は生返事した。そして、多代の色の白い瘦せたヒステリックらしい顔を心に浮かべた。

「彼女がゐるとどうも家の中が面白くないんだ。どうせ何處かへ片付けやうとは思つてるんだが、今直ぐにと云ふ譯にも行かないし、實は僕も困つてるんだよ。和泉町へもその相談を持掛けたんだが、彼家も大人數だから迷惑らしいんだ。それは強ひて頼めば置いて呉れんこともないけど、何だか氣の毒なやうだね」

「彼家は駄目でせう、家の人數を減らしたい位に思つてるんだから」

香取は俯首いてナイフとフォークを動かしながら、相手の要求の意味を考へてゐた。上野町の湯原の家の中を思出して、そのゴタついてゐる様を想像してゐた。そして、自分がその混雜の中へ入つて行く由縁はないやうに思はれた。

沈黙が暫らく續いた。湯原は肉を含んでは、口と喉とて音を立てゝゐたが、やがて、ナイフを置いて大きな息を吐いた。香取は夢から醒めたやうに目を上げて、

「僕は今一人なんですからね、若い者が一人ゐる所へ多代さんを泊めると云ふのも」と言流んで、「他人に彼此云はれる位構ひもしないけれど……」

「だけど彼れならそんな心配は入らないよ」と、湯原は壓被せるやうに云つて、「素性が分つてるんだもの。湯原の妻の從妹を預つてるんだと云へば何でもないぢやないか。それに君一人と云つたつて、下女もゐるんだしね」

「だけど、少し困りますねえ」と、香取は強ひて口元に笑ひを浮かべた。

「さうかなあ。外の事とは違つて無理にとも云へないし、僕も外の方法を考へるかね……なに、田舎へ追返せばいゝんだが、それも可哀相だと思つてね」

湯原は最早思止まつたらしかつたが、さうなると香取は多少氣の毒にもなつた。上京の當座世話になつたこともあり、可成り面倒を掛けてゐるのに、その人の折入つての頼みを卒氣なく斥けたのが、氣の毒になつた。て、その埋合せに「酒を飲みますか」と、機嫌を取るやうに云つた。この男の酒癖の悪いことはよく知つてゐるので、成べく酒の相手にはならぬやうにしてゐたが、わざ／＼來たものをこのまゝ返すのが變だつた。

「あゝ。先さからさう思つてたんだよ。折角御馳走になるのに酒の氣がないと、どうも物足らない」と、湯原は急に元氣づいて、「ほんの二三杯あしゐるだけがいい。七時迄に本郷へ廻らなくちやならんのだから」と、時計を出して見た。

香取は自分で電氣を點けて、新に食物と酒とを命じた。彼れは永らく酒の香ひさへ嗅いだことがなかつた。いろ／＼の世の快樂に遠かつたことが

思出された。

「君はあまりやれん方だね、僕はいくら貧乏してもこの味だけは忘れられんよ。銚子が一本此處へ立つてゐるだけでも、何だか座が陽氣になるぢやないか。」

湯原はこんなことを云ひながら、料理には手も付けず、甘さうに飲出した。そして時々思出したやうに時計を見ては、「まだ早い」と呟いた。銚子が二本空になつた頃、香取の顔も紅くなつた。もうこれ切りと、珈琲を云付けたが、湯原は飽足らぬらしく、

「君にばかり奢らせちや濟まないから僕が麥酒を奢らう」と云つて、止められるも肯かず、墓口から銀貨を出して、それを數へながら、自分で階下へ下りて、麥酒二本の代を拂つて來た。そして、その二本を兩手でぶら下げ、ニタ／＼笑ひながら元の座に戻つた。

食卓は酒の乗る料理の汁で見苦しく汚れた。ゴールデンバットの臭ひを  
含んでその邊に漂ふた。湯原はその濁つた空氣の中で次第に生々した顔付  
になつたが、

「しかし、君はどう思ふね。多代は一才いゝ女ぢやないか」と突如に訊い  
た。

「え、悪い容色ぢやないでせうね。色は白いし、細そりして、姿はいゝ  
し」と、香取は何氣なく云つた。

「何處かい、貰ひ手はないものかね」

「そりやあるてせう。……それよりも看護婦にするとか、呉服屋の店員に  
するとか云つてたのは、もう止めにしたんですか」

「彼女も我儘だから、中々此方の云ふ通りにやしないよ」

湯原はふと考込んだが、やがて「僕も今度と云ふ今度は弱切つてるんだ、

思案に暮れてると云ふ次第だよ」と、さも心配さうに沈んだ聲で云つた。

「何故です？」

香取はその男が家庭のために弱つてゐるのをさして怪みはしないが、酒  
に酔ひながら、こんな歎息の聲を洩らすのを不思議に思つた。何時もなら  
直に酒に酔潰されて、見苦しい眞似をし出すのに、今日は心の底に何處か  
酔はない所があるやうに見えた。

「どうかしたんですか」と、再び訊いた。

それに直ぐには答へないで、湯原はグビ／＼麥酒を呑んでゐた。香取は  
氣が詰るやうになつた。

「彼れを君の家へ置いて貰えなけりや、當分僕を置いて呉れないかね」

「君なら構ひませんが、何故です」

「この頃家を逃出したくてならんのだよ。男が家を逃出すなんて、少し不

見識な話だが、止むを得ずんばさうでもしなければ、僕も安心して夜の目も眠れないんだからね。人間として自分の家で寝てゐながら、夜中警戒してゐるぢや憐れなものだよ」と、湯原は歎息して「然し可笑なものだ」と、獨合點をして首肯た。

「多代さんがその原因なんてすか」香取の心にもぼんやりその家の様子が浮んだ。

「まあ一度来て見たまへ、僕の妻も晝間は鼻唄なんか唄つて、シャン／＼働いてるが、夜になると気が變になつて、隅つこへ行つては蹲んでメヌメ泣出すんだよ。先日も夜中にランプを點けてコソ／＼させてるから、起きて見ると遺書を書いてやがるんだ。……湯原は話しかけて、ふと厭氣が差して、「まあそんな話は止さうよ」と、口を噤んだ。

香取もさして詳しい事情を聞たくはなかつた。麥酒も盡たのを機會に「も

う歸りませうか」と、浮腰になつて促した。

「まあ、もし僕の對手をして呉れたまへ」

湯原は押付けるやうな手付をして引留めて、また墓口から銀貨を出して「まだある／＼」と云ひながら、ヒヨロ／＼と立上つて、麥酒を取りに階下へ下りた。一本鷲摺みにして上つて来て、香取の側に胡坐を掻いて、コソコソを押付けた。

「しかし、多代はいゝ女だらう。君はさう思はないか」と、再び同じ事を云つた。が、前よりも言葉に力を入れて目付も底氣味が悪かつた。

「一體赤ん坊の顔は男親に似るものだらうか、君はどう思ふ？」

「さあ。似なけりや變てせうね」

「妙なものだね。子供の顔は親に似る……それ所ぢやない、妻君の顔が次第に亭主に似て、亭主の顔が次第に妻君に似て來ると云ふぢやないか。何

時か雜誌で讀んだことがあるよ。人間は何でも傳染力を持つてゐるんだね」と、鹿爪らしう云つて、「二長町の奴なんか皆んな没分曉漢だが、君は僕の味方だらう」と、香取の手を握締めた。二人とも手の平が温かつた。香取は立上つて、帽子を被らせて追立てるやうにした。

湯原は追立てられながら、外へ出て、江戸川まで來たが、香取が手を離すと、わざと地べたに蹲んで動かなくなつた。「今夜は君の家に泊るよ。置いてけ堀にするのは慘酷だよ」と哀れさうに云ふ。

「ちや、僕が連れて、上げよう」と、香取は弱り果て、俥を呼んだ。自分も俥に乗つて隨つて行くことにした。

「君の家へても何處へてもいゝ所へ連れて、呉れ。今夜はおれの家へは歸らないぞ。君とは古い友達だ」

湯原は俥の上で首垂れて叫んだ。

四

醉漢を乗せた車夫は曳難さうにして、振返り／＼のろく駈出した。香取は俥の上で腕組みして、紅い顔を冷たい風に吹かせてゐた。湯原の云つた言葉を止切れ／＼に思出しながら、その後を追つてゐると、行先の家がどんなに變つてゐるかと思はれて、不氣味な中に多少の面白さを覺えた。

「何處へおれを連れて行くの」と、醉漢は折々首を上げて叫んだ。

切通を下つて上野町近くなつた時分、香取の酔ひは醒めて、薄著の肌は寒くなつた。泥構に沿うた湯原の家は軒燈が消えて、雨戸も鎖れてゐた。入口の柳の木の側に車を卸させて、格子戸を開けると、内から女の足音がして、玄關の障子が細く開いて、ぼんやり白い顔が現はれた。そして怪し



さうに薄暗い此方を見詰めた。

「湯原さんが酔拂つたから連れて歸りました」と云つて、闕に倒れてゐる湯原を抱くやうにして玄關へ引摺上げた。

茶の間からランプの光が流れ出て、立つてゐるお多代の顔を横から照らした。さして寝てはゐなかつた。後れ毛が白い頬に垂れてゐる。酒臭い息に顔を擧めて、湯原を茶の間へ連れて行かうとした。

「僕は此處で失禮します」と、香取は一寸會釋して歸りかけたが、今まで黙つてゐた湯原に俄かに呼留められて、暫らく迷つた。こんな所にゐては、厭なものを見せつけられさうな気がしたが、それでも最少し踏留まつてゐたくもあつた。で、帽子を被つたまゝ茶の間へ入つて、長火鉢の側で煙草に火を點けた。部屋の中は以前のやうに取亂されてはゐなくて、拭掃除も行届いてゐる。ランプのほやも綺麗に磨かれて光は明るかつた。

「酒を出せ」と、湯原は起上つて、付元氣で叫んだ。が、反響はなかつた。お多代はお茶を入れて二人の側に置いて、靜かに次の間へ入つて襖を締めた。

香取は耳を澄してゐたが、次の間には微かに衣摩れの音のするばかりで、外に物音はしなかつた。

「奥様は……」小聲で訊くと、

「居るだらう」と、湯原も小聲で冷淡さうに答へたが、その聲は泥酔者の聲ではなかつた。周圍に氣を兼ねてゐるやうだつた。

二人は暫らく黙つてゐた。香取は歸るべき機會を失つて、帽子を脱いで、茶箆等の後の狭苦しい所に坐つた。劈痕の入つた黄ろい壁には、死遅れた弱々しい蚊が幾つも、光を慕つて匂つてゐる。

「久振りで奥様に會つて行きませう」と、思切つて云つた。

「あゝ、會つてやりたまへ」と、湯原は答へたが、次の間へ知らせやうとはしなかつた。

香取は立上りかけたが、その襖を無断で開けるのが躊躇された。聲を掛けるのも變だつた。で、「何をしてるんです、寝てるんですか」と、小聲で訊いた。

「どうだか」と、湯原は眉を動かして、壁の方へ向つて、酒臭い息を強く吹出した。

襖一重隔て、怖い者でも住んでゐるやうに思はれた。香取は自分達の潜々聲をも陰氣に感じた。

ふと次の間でも聲がした。お多代が何とか答へてゐたが、やがて襖が少し開いて、平顔の女が首を傾げて覗いて、「まあ元一さん」と薄笑ひをした。

をして、ちづく茶の間へ入つて来て、闕近く坐つた。落着かぬ目は頻りに目叩きしてゐる。髪はちやんと丸髷に結つて、衣服も見苦くはない。以前よりは小綺麗にしてゐる。

「暫く御無沙汰しました」と香取は堅くなつて挨拶した。

「ほんとに暫くしてしたわね。私、是非一度貴下にお目に掛りたかつたのですよ」と妻君は懐しさうに云つて、早くも目に涙を浮べた。

「近日晝間伺つて、國技館の菊見にでもお伴ませう。何時だつたか團子坂へ行つたことがありましたねえ」

「さうでしたねえ。だけど、私も菊見なんかに行かれはしませんよ。何處かへ奉公にでも出ようかと思つてますの。私など無教育で、何一つ藝は出來ないんですけど、ほんの口過ぎさへ出來ればいゝんですから。……その事で元一さんにも相談したいと思つたのですよ、何處か私のやうな者に

でも勤まる所はありませんでせうか」

「どうですわえ」

香取は答へ様もなく微笑してゐた。妻君の顔は磨立てられてはゐるが、見てゐる中に次第に鬱陶しくなつた。

「一生のお願ひだから、心當りがあつたら訊いて見て下さいましな、私一人餓死にしなければいゝんですの。私もあの時刺續でも覺えとけばよかつたんですけど、今となつちや後悔してゐるんですけど、あの時は家の世話をして呉る者がなくつて、そんな譯に行かなかつたんですからねえ」と妻君はさも心細さうに云つた。

「何故そんな氣になつたんです」、香取は眞面目に訊くべき折ではないと思ひながら、打切棒に訊いた。

「でも、私が居ると邪魔になるんですから」

言葉は弱々しかつたが、目は角立つて、側面の多い顔中に神経が通つた。そして、両手で自分の胸を抱き締める様にした。

「何を云ふんだ、馬鹿！」湯原は聲に力を入れながら低く叫んだ。「誰れが邪魔にしたと云ふんだ？」と眉を蹙めて云つて、香取の方へ向いて、「何と云ふ量見だか、この頃戀意な者さへ見れば、今君に云つたやうなことはかり云つてやがるんだよ」と、情なさうに云つた。

香取は相手の顔を見ないやうに首俯いた。妻君は口を閉ぢたが、やがて足音を盗んで次の間へ入つて襖を締めた。

「あんな女ぢやなかつたが」と、湯原は溜息吐いて、「しかしこれまで随分貧乏な思ひばかりさせたんだから、僕も成べく手荒なことはしないんだがね。……君も昔からの知合ひだから、菊見にでも芝居見にでも連れ出して少し保養させてやつて呉れたまへ。若しも馬鹿な眞似でもされた日にや、

當人ばかりぢやない僕まで迷惑するからねえ」

「ちうですわね」

香取は湯原の氣遣つてゐる「馬鹿な真似」を思出して、不意に可笑くなつた……

夫婦がまだ公然の結婚をしないで、神田の玩具屋の二階を借りて、人目を忍んでゐた時、妻君は妊娠してゐながら、とても添遂げる望みはなさうだと思つて、取逆上せて、剃刀を喉に當てたことがあつた。「なに、あれは狂言だよ」と、和泉町の湯原の義兄が後で笑つてゐたが、その時の香取の目にはさうとは見えなかつたので、側でハラ／＼してゐた。

「昔から妻君にはそんな傾向があつたんですわね」と、それを云出した。湯原はそんな昔を思出したくはなくて、碌に其話に乗つて來なかつたが、ても微笑を浮べて、

(36)

「今夜は折角君が來て呉れたのだから愉快に話したいものだね」と、急に調子を和らげた。そして、次の間へ入つて、二人に向つて、宥めるやうに何か云つてゐたが、やがて、和服に着變へて、手を執るやうにして妻君を連れて來た。

「これから元一君に時々遊びに來て貰ふやうにしたらいいだらう」と、子供を賺かすやうに云つて、明るい長火鉢の側に坐らせて、「何かないかい、お菓子でも」と訊いた。

妻君は身輕に立つて、茶箆筒を搜して、錆びたブリキの罐の中から鹽煎餅を掴み出して、菓子皿へ移してゐたが、その間にお多代は「お湯へ」と一寸膝をついて、斷つて、臺所の方から出て行つた。その下駄の音が門の外へ消えると、湯原は心が軽くなつたやうに賑やかに口を利き出した。妻君に汲んで來させたコップの水を一息に飲干して、快く大きな息を吹いた。

(37)

「今日は香取君の方へ廻つて御馳走になつたんだが、彼方の方は静かだから歩いても気分が清々するよ。彼方へ移りたいもんだね。狭くてもいいから、庭のある瀟洒した家へ住みたいよ。そして僕も植木いぢりでもして、呑気にやつて見たいな」と、誰れに云ふともなく云つた。妻君は燈火に顔を背けて何とも答へなかつた。

「どうせ二人切りだから、下女も手傳ひも入らないんだし、部屋借りをした時の思ひをすりや、どんな狭い家だつていいんだからね。全體この家だつて、今の僕にや少し分に過ぎるんだ」

湯原はそれとなくも多代を只の邪魔物扱ひして、夫婦切りの閑静な住ひを望むやうな口振りを装ふた。

「香取君の近所へ越して、お互ひにまた繁々往來するやうになるのもいいね。お互ひに氣心を知合つてるから、自然話が合ふからね」と、相槌を打

つて貰ひたさうに二人の顔を見た。

「だけど、あんな場末ぢや不便で仕方がありませんよ。奥様は僕の居る邊へ来たとはしないでせう、一度遊びに入つしやい」

香取は二人の間を取爲すやうに、何とか氣の利いたことを云はうと思つたが、こんな場合に相應しい言葉が見付からなかつた。

すると、その中妻君は臺所の障子を開けて身を隠して、暫くしても出て來なくなつた。

「あ」と、やがて湯原は聲を掛けた。

振返つて耳を澄まして、二三度續け聲に呼んでも手答へがない。顔は自から曇つて來た。「何をしてやがるんだ」と。呟きながら、彼れはランプを持つて臺所を覗いた。

香取も隨いて行つて肩越しに見た。妻君は窓の側に蹲んでゐる。そして

燈光が顔に射すと、すつと立上つて、目をシヨボくさせて、奥の間へ入つた。其處には針差の側に縮緬の切れなどが周圍に不似合な華美な色をして、ゴチャ／＼置かれてゐるのがちらと見えた。

湯原は襖を締めて元の座へ歸つて、「どうしたんだか、この頃は矢鱈に着物を拵へたがるんだよ、戶外へは些とも出もしない癖に」と苦笑して、「これまで年中粗末な服装をさせても苦情を云なかつたんだから、その埋合せだと思つて僕も無理な工面をして拵へてやることはやるんだが……」

妻君はわざとあんな真似をしてるんぢやないかと、香取はふと疑つた。そして、神田の剃刀騒ぎなどを再び思出して、

「君も子供があつたらよかつたんですねえ」と暫くして云つた。あの時の腹の兒は生れると直ぐに死んだのである。

「うん」と、湯原は冷淡に答へて口を噤んだ。

其處へも多代は濡手拭で包んだ石鹼箱を持つて歸つて來た。磨かれた白い顔は二人の目の前を掠めた。

「此處へ来て少しも話さない」と、香取は聲を掛けた。

「え」と、多代は躊躇してゐたが、湯原も側から口を添へたので、其處に坐つて、茶を入替へたり、火鉢に炭を繼いだりした。

女と云ふ女には久しく近寄らなかつた香取の目の前に、白い手が動いたり油臭い髪の毛の匂ひがした。すると、我れから忌みて避けるやうにしてゐた以前の女までも連想された。

そして、湯原の秘密がまさ／＼と其處に浮上つたやうな氣がして、何喰はぬ澄ました顔が小憎らしくなつた。「多代はい、女だらう」と、酔拂つて云つた言葉が、今その閉ぢた唇で一層力強く語られてゐるやうに思はれた。

て心を留めて見てみると、次第に豫ねて知つてゐるお多代と同じ人とは思はれぬほどに見直された。短かい眉も尖つた鼻も元のまゝだが、何故だか、その顔に魅力があるやうに感ぜられた。妻君のよりは見劣りする艶のない衣服を着て、銀杏返しも崩れかけてはゐるが、世帯簀の影はなくて、淋しい顔立の中に生々した光があつた。潤みのある黒瞳は相手次第でどんな誘惑に富んだ表情をもしさうだつた。

て、香取は湯原を側に置いてこの女を見てゐるのが苦しくなつた。その誘惑に富んだ表情を想像すると、神経が顫へるやうだつた。

何気なく世間話をしながら、前に並んでゐた二人の秘密の道筋を心當てに描いてゐると、お多代の姿はますます彼れを焦燥すやうになつた。そして、どんな目鼻立の揃つた美しい女を此處へ連れて來たつて、それよりもお多代の方へ心が惹かされさうな氣がした。

此家の秘密をも細に知りたくなつた。

て、香取は何氣ない態で、

「貴女はずつと東京にゐるつもりなんですか」と、訊くと、

「いゝえ」と、お多代はさつぱり云つて、「故郷から何とか返事がまゐります等ですから」

「ぢや、歸ることに極つたんですか。何時だつたか、和泉町の叔母さんに會つたら、どうかして東京で暮らさすんだとか云つてましたが、それも駄目になつたんですか」

「どうですか。私など東京のやうな所では何も勤まりませんわ」とお多代の目は光つた。と、

「なに、駄目になつたつて譯ぢやないさ」と、湯原は傍から慌て打消して、「まあいゝ〜」と、その話を堰き止めるやうにした。そして、「今日酔つた

紛れに何か君に云つたかも知れんが、あれはあの場さりのことにしといて呉れたまへ。僕も少し考直さうと思ふから。いづれ今度の日曜あたりゆつくり君に會つて話をしよう」と香取に向つて云つた。

もう歸つて呉れよと云はぬばかりの口振りだつた。

て、香取は急に歸仕度した。もつと此家の内情に踏込んで訊きたがりながら、飽氣なく立上つて、「僕も久振りて此方へ出て來ると、あんな淋しい所へ歸りたくなくりますね」と、戯談らしく云つた。

「さうかねえ。夜具があると泊つたつていゝんだが」

「もう永らく他所の家へは寝ませんよ」

「自分の家で氣樂に寝られれば、それ程結構なことはないよ」

二人は立ちながらこんなこと云つてゐたが、ふと、妻君が襖の側に寄つて首を傾げて此方を氣をつけてゐるのが、隙間から見えた。香取は變な氣

持になつて、「奥様にもよろしく」と云つて、素早く戶外へ出た。

が、このまゝ直ぐ歸る氣にはなれなかつた。また宵の口で、左右の狭い町は賑かだつた。彼れは何方の道を取らうかと、門の前で目を迷はせたが、やがて、眞向ひの床屋の明るくて小綺麗なのに氣付くと其處へ入つた。

椅子に凭れて鏡に映る自身の顔を見ると、濃い髻が伸びて薄汚なかつたが、頬の色は稍々元氣づいてゐた。虐げられた體力が次第に回復して、若い命の芽をまた吹いてゐるやうにも見えた。

眠くなりそうない氣持で髻を剃られながら、側の客の話を聞くとともに聞いてゐると、頻りに町内の噂がされてゐた。酒呑みの筆頭は誰れだとか、女道樂の大關は誰れだとか、町内の美しい女や財産家をも數へ上げて、一々批評を加へてゐた。古著屋の裏の二階屋にはこの頃小意氣な女が移つて來たが、どう見てもお妾だ。藥屋横丁の突當りの空屋も借人が出來たと



見えて貸家札が剝がれたと、手に取るやうに町内の模様が見え、威勢のいい聲で語られてゐた。

その様子だと、直ぐ側の湯原の家の噂も出はしないかと、香取は待設けてゐたが、遂に一口も出なかつた。が、「古著屋の裏の二階屋」は湯原の臺所から直ぐ前に見上げられるので、彼れの心にもその狭い二階の様が想像されて、話を聞いてゐても面白かつた。

床屋を出ると、湯原の家の前を横目で見ながら通抜けて、廣小路の方へ出た。不測何の氣なしに散歩する時とは異つて、今夜は周囲の人通りや物音が妙に心を動揺させた。陰氣な妻君の顔や、誘惑に富んだ多代の顔や、秘密に苦んでゐた湯原の平凡な顔が、頭の中に蟠まつてゐて、只見て通る縁のない人の顔をも濁した。あの茶の間の重苦しい空氣に暫く浸つてゐた

いめか、最早淡然として其處等の物を見ることが出来なくなつた。

で、彼れは所在なく江戸川行の電車に乗つて、空家のやうな自分の家へ歸つたが、茶の間では小さいランプの心を細めて、下女が居眠をしてゐた。

「誰れも來なかつたかい」と、滅多に訊かないことを訊いた。

下女は其珍らしい聲に驚いた様にキョト／＼して、「いゝえ何方も」と答へた。

香取は自分でマッチを擦つて暗い座敷へ入つたが、すると、今まで荒廻つてゐた鼠が何處へか逃込んで聲を収めた。早稻田座の打出しの太鼓の音が、何時もよりは際立つて響いて來た。

近所の家はもう寢靜つてゐるらしい。彼れは机の前に端坐して暫く煙草を吸ひながら、側に散らかつてゐた書物や著物の元の儘に散らかつてゐるのを見た。

「何故上野町まで随て行つたらう。當分あんな家へ近寄たくはなかつたのに」

彼れはつひした興に乗つて、あの家の閨を跨いだことを悔むた。そして、もう當分は又と出掛まい。江戸の昔噺の好きな爺さんや婆さんのゐる和泉町の家や、その外の懇意な家へ行つても、湯原の家へは矢張遠ざかつてゐやうと思つた。

が、雨戸一つ隔てた外の廣い闇の世界に、ある三人の顔のみが鮮かに浮出て見えて、消さうとしても消し難くなつた。同じ屋根の下に三人が夜を過してゐるのが不思議にもなつた。互ひにどんな夢を見てゐるのだらう？ 彼れはその不安な夢の中に引込まれながら、昔話に聞いた刈萱道心の發心の由縁を思出した。假寝をしてゐる妻と愛妾の髪が蛇になつて、障子に影を映しながら闘つたさうだが……

さう思ふと、軒を並べた幾萬の人家が、寂として聲も立てずに、安らかに眠つてゐるのが不思議になつた。

耳を澄ますと、遠くでは犬が吠えてゐるばかり。直ぐ障子の側では、庭の楓の葉が囁くやうにサラ／＼音を立てゝゐる。

彼れは身に染みる淋しさに堪へられなくなつて、懇意だつた二三の男と女とへ珍しく手紙を書いた。謙遜した文句で、相手の愛情を乞ふやうなことを書いて見た。そして、その中の誰れからでも、自分を思つて呉れる情に燃えた返事の貰へるやうにと望んだ。

(五)

その翌日は平生より遅く目を醒ました。縁側に差込んでゐる冴えた朝日

は、彼れの心の底へ染込んで、その寝醒めを快くした。

起きると、暫く狭い荒れた庭を彼方此方歩くのが、この頃の習慣になつてゐるので、この朝も無心で庭へ下立つて、光を浴たが、ふと氣付くと、見馴れぬ白っぽい瘦せた小犬が目の前に足を伸して日向ぼつこしてゐる。近づいても身動きしないで、懐つこい細い目で此方を見た。

「何處の犬だい、この犬は」と、下女を顧みて訊いた。

「何處の犬ですか、今朝牛乳屋に隨つて來ましたんです。餓じさうで可哀相だから、御飯をやると、悦しさうにしてよく食べましてすよ」と、下女は縁側へ出て來て「白々」と舌たるい聲で呼んだ。

「食物なんか遣ると、出て行かなくなるぜ。外へ出してしまへ」

かう命ぜられて、下女は木戸を開けて、劬り／＼追出さうとしたが、小犬は何時かその裾を潜り抜けては、庭の方へ舞戻つた。

香取はその様を見ながら朝食を食べてゐたが、食事が済むと、「おや、おれが外へ連出してやらう」と云つて、小犬を誘つて、木戸から出て行つた。小犬は鼻を蠢かし尾を振つて、後になり先になり、さも新に主人を得たのを喜んでゐるやうだつた。

長い垣根を傳つて表通りへ出ると、易者の黄ろい看板と、白塗の小さい板に書いたかみゆひの文字が先づ目に付く。香取の頭の曇り加減で、その二つの看板が佗しさうにも、手頼なさうにも見えることがあつたが、今日はそれが澄んだ空氣の中に懐かしく色取られた。格子から顔を出した男の顔も晴々しかつた。

淋しい夜を送つた後で、こんな氣持になれたのが、香取は涙ぐまれるほど悦しくてならない。一度は厭がつてゐた和泉町の戸田の家でも、今日は自分を喜んで迎へて呉れさうに思はれたので、直ぐその方へ足を向た。

神樂坂下から、小犬を見返りもしないで電車に乗った。

和泉橋を渡つて、林檎や柿や秋の果物の並んだ大きな店の側を曲つて、横へ外れると三味線の音が洩れてゐた。切髪の品のいゝ戸田の婆さんが、孫に長唄を教へてゐるんだと直ぐ氣付いた。格子戸の前に立つと、今客を送出した妻君が、「まあ、お珍らしい」と微笑を湛えた。

「上野町へも些とも入つしやらないつて、何時だつたか、湯原さんが云つてましたよ。どうなすつたんです」

「昨夜彼家へ行きました」

「さう、どんな風でした彼家は？……今日お多代さんが此處へ来る筈ですよ」

その言葉が意味ありげに、香取の耳に響いたが、「さうですか」と何氣なく答へて、奥へ通つた。

湯原の家とは異つて、座敷の装飾も行届いて、床の間には白い花瓶に黄白の菊が咲亂れて、掛物の墨繪の前に鮮明な色を浮かせた。張立ての障子には明るい日が差してゐた。

香取はその光を自分の家よりも訝えてゐるやうに思つた。妻君が茶を入れて来る間、中二階の隠居部屋の三味線に耳を傾けてゐると、「うたふ小唄の聲高輪に」と云ふ所を頻りに繰返してゐる。

「大分六ヶ敷ものを習ふやうになつたんですね」と、妻君を見て云ふと、「この頃は自分もお稽古が楽しみになつたんでせう」と、妻君も一寸耳を聳てたが、さして興味もないらしく、其方へは話を持つて行かないで、「貴下は此頃何處へもお勤めにならないんですか」と訊いた。

香取はそれに答へるのが厭だつたが、仕方なしに、「ええ。私には勤まり

「さうな仕事が見つからんのですから」

「そんな事はありますまいよ。……では、お家で勉強して入つしやるの」

「え」

「貴下はまだお若いんだから、御出世なさるのもこれからですわねえ」

「え」

妻君とのこんな話は、香取には少しも面白くなかつた。せめて、隠居が稽古を終つてこの座に加はつて呉れ、ばと望んだが、彼方では「チャンく」と合の手が長く續いて、何時果てさうでもない。で暫くして、

「多代さんは何しに来るんです」と、香取はふと氣を變へて訊いた。

「一寸面倒な事があるんです。あの女にも困つてしまふ……」妻君は調子に乗つて云ひかけたが、「このまゝで内所で済ませたいと、私達は思つてゐるんですがね。どうなりますか」と、言葉を濁した。

(54)

「そんな大問題があるんですかね」香取は些しも譯を知らぬ者のやうに装つた。

「それも成べくなら、私一人てそつと始末を付けたいと思つてゐるんですが、今日あの女が来て何と云ひますか」

妻君は湯原の家の事を言出しかけては隠すやうにしてゐたが、その一言々々が次第に香取の胸を曇らせた。昨夕上野町の茶の間にゐた時と同じやうな氣持ちになつた。そして、お多代が周囲の醜い意地の悪い人間に、汚されて苦められてゐるやうにのみ思はれ出した。この妻君だつて口先で情深さうなことを云ふばかりで、その實情な人なんだから、どんな間違つた差出口をするかも知れはしない。

すると、どうかして自分の手で助けてやりたくて堪らなくなつた。お多代の胸に収めてゐる心配を打明けさせて力になつてやりたい。一日も湯原

(55)

のやうな男の側へは、置くに忍びない。

て、香取は竊かにその方法を考込んで、妻君が何を話かけても、空々しい返事はかりしてゐた。三味線の音までも陰氣になつて来た。

と、やがて玄關に女の聲がして、妻君は立つて行つた。座敷へ連れて来るのかと、香取は心構へしてゐたが、お多代は茶の間へ連れて行かれたやうだつた。

て、香取は一人座敷で所在なげに煙草を吹かしながら、次第に單調になつて煩く聞え出した中二階の稽古三味線の音と、止切れぬに漏れて来る茶の間の話聲とを聞くともなく聞いてゐた。すると、兩方からの物音が、今朝から珍らしく透徹るやうに冴えてゐた心を、次第に濁してしまつた。あの婆さんが輿に乗つて楽しさうに弾出す音や、爺さんが微酔ひの上機嫌で話出す夢のやうな昔話は、彼れの耳に快い催眠歌となつて響くので、知

人の中でもこの和泉町の老人ばかりは、死んだ祖父や祖母を思出させるほどに懐しかつたが、今日は和泉町の空氣も不純な波動で亂れてゐるやうだつた。

香取の傷つけられた神經は、永い間茫然して平氣ではゐられなかつた。そして、お多代は此家へ来た用事と云ふのが、さまざまの幻想の種となつて、三味線の音に妨げられて聞取れない茶の間の潜々聲が、針のやうに胸に觸れた。上野町で見た顔と、「私のやうな者は東京では何も勤まりません」と、寂しさうに云つた言葉とが、目と耳とに粘付いてゐるやうに思出されて、邪氣のない田舎の女が希望を抱いて来たものを、酷たらしく苦しめて傷けて歸すのが、痛々しかつた。自分に關係のない他所事とは思はれなくなつた。

て、今此家の妻君がどんな智慧を付けてゐるのか、憐れなる女の運がそ

れて極まるやうに氣遣はれて、焦燥かしがつてゐたが、暫くして潜々話は止んで、妻君は「貴女も此方へ入つしやい」と云つて座敷の方へ來た。お多代も後から隨いて來た。

「怠屈だつたでせう、一人ぼつちで」と、妻君は笑顔をして、障子を開放した。

「私はもうお暇します」と、香取は接穂なく云つて、今にも立上り相な風をした。

「どうしたんです、稀に入つたのに」妻君は不審さうに顔を見上げた。

「今日一寸行かなくちやならん家があるんです」と、香取は言濁したが、直ぐに立上りもしなかつた。

「久振りてせい／＼御馳走しようと思つてるんですけれど」と、妻君は笑ひながら戯談らしく云つて、斜にお多代の方を見て、「これで香取さんも、一

時は面白いことがあつたんですよ。随分お惚氣を聞かされたの」と、蓮葉な聲で云つた。

が、お多代は口元を一寸綻ばせただつた。香取は詰らぬ事を仰山さうに喋舌られるのを恐れてゐた。妻君は相手が興がらうとも厭がらうとも關はないで自分許り面白さうに、話を進めやうとして、

「何とか云ひましたね、あの女は」と、香取の方へ首を向けて、「湯原さんのお話だと、大變別嬪だつたさうですね。私、一度その人の寫真でも見たいと思つて、幾度もお頼みしたのに、どうしても見せて下さらないんですね」

「私の家には女の寫真なんか一枚もありませんよ」と、香取は卒氣なく答へて、妻君が湯原から聞いた事に、尾に尾をつけて喋舌り出さぬ先にと、お多代に向つて、「貴女はずつと家へ歸るんですか」と訊いた。

「え、直ぐ歸りますわ」

「僕も上野の方へ行くんです」香取はせめて歸りに道連れになつて、女の今の境遇を訊きたかつた。

「まあ、お婆さんに會つてらつしやい、お珍しいんだから」

かう云つて、妻君は頻りに引留めやうとしたか、香取は浮腰になつて、お多代が立ちもやらず、庭を見ながら愚圖々々してゐるのを焦燥かしかつてゐた。

「貴女はまだゐるんですか、僕はもう出掛けなくちや」と、何時だか時計の鳴り出すと、つと立上つて縁側へ出て、お多代を促すやうに云つた。

お多代もそれを機会に、「では私も」と、妻君に暇を告げたが、直ぐには歸らないで、婆さんに挨拶しに中二階へ行つた。妻君は香取を見送つて玄關へ出て、

「貴下は今日上野町へはお寄りなさらぬや」と、譯ありげに小さい聲で云つた。

「え、今日は寄らないつもりです」と、香取は振返つて、「何故です」と、小さい聲で云つた。

「ではいゝんですがね。お多代さんが今日此處へ來たことを、彼處の奥様に知らせたくないんですの、知らせちや一寸都合が悪いの」

「どうですか……そしてあの女の身の上は何とか極りがついたんですか」「と云ふ譯でもないんですがね、二三日中に何とかしようと思つてますの。

……その中お暇な時に入つしやい、ゆつくり話して聞かせますから。随分長い間ゴタ／＼してたんですよ」と、妻君は相手の好奇心を惹起すやうに云つた。

「私が暫く引込んでた間に、いろんな事があつたんですね」と、香取は輕



く笑つて戸外へ出た。すると、縁側にお多代の足音がしたやうだつたが、また妻君に引留められたのか、容易に出て來なかつた。で、待あぐんで、菓物店の側までフラ／＼歩いて、その角に立つて、廣い電車通りを見渡してゐた。幾臺もの電車の行過ぎるのを目で追ふたり、向ひ側のいろ／＼の店を無心で見てゐた。と、ふと、直ぐ側の牛屋へ學生らしい若い男が多勢入つて行くのに氣がついた。

彼れは慌だしく帯の中から蓋口を取出して見た。そして、幾らも入つてゐないのに失望した。お多代から話を聞くにしても、出来ることなら、打寛ろいて甘い物でも食べながらにしたいのに、これでは自分一人快く午餐を食べるだけにも足らない……。

何時の間になくなつたのかと疑ひながら、彼れは自分が唯一の手頼りとしてゐる財産の、次第に蝕滅らされてゐるのに強く氣付いた。やがて、蝕

潰された果には、再び人の中へ出て何かの懶い仕事をしなければならぬが、自分はそれに堪へられるだらうか……。

で、彼れは半年先一年先の自分の姿を身窄らしい痛しい者として見た。耳に騒々しい町の物音を聞き乍ら、心では今立つてゐる場所をも忘れたやうに淋しい夢に沈んでゐた。目の前を往來してゐる人々は、只幻のやうに見えて、以前彼れが使はれてゐた主人や同僚の顔や、その頃の仕事場が却て明かに心に浮上つた。

と、其處へお多代の姿が現はれた。彼れは胸を躍らせて夢から醒めて、その方へ近づいた。

此處で待つてゐられたのを意外に思つたらしい顔付して、お多代は「どうもお待たせました」と、足を留めた。

「近いんだから電車に乗らなくつたついでせう、貴女に訊きたいこともあるし」香取は遠慮もなく連立つて歩き出した。そして二三丁黙つてスタック歩いてから、足を緩めて、

「湯原君は貴女を私の家へ預つて呉れと云つてゐましたよ」と、何気なく云て、女の顔へ目を向けた。

お多代は眩さうにして、「さうで御座いますか」と冷かに答へた。

香取は自分の思つてゐることを、遺憾なく相手の胸に傳へやうとしながら、相應しい言葉の見つからないのに苦んだ。で、また暫く黙つて歩いてゐたが、強ひて道伴れにされたのを、女が迷惑がつてゐるらしいのが目についた。そして、此方から口を利かなければ、女は何時までも黙つてゐさうだつた。

香取は氣分を變へやうと思つて騒がしい大通りから、狭い道へ外れて行

つたが、浮かりしてゐると、何も話さない間に上野町まで来てしまひさうだつた。で、突如に、「僕は貴女が困つてゐるんだらうと思つて、非常に氣の毒に思つてゐるんですよ」と、打切棒に云つたが、ふと感情が高まつて来て、我知らず言葉を續けた。「戸田の伯母さんだつて親身に貴女の事を心配してゐる風はないんですよ。あんな人の云ふ通りにしちや貴女のためになりませんよ。湯原君も無責任だし、あの妻君も氣が變になつてゐるから、貴女はあの家に永くゐられないんでせうが、今の場合よく考へて身の振方を極めないで取返しのかんことになりませうよ。田舎から東京へ来た女で男に騙されて、酷い目に會つた者は幾らもあるんだから。僕は、貴女を預かるとは湯原に斷つたけれど、しかし貴女の今の境遇をよく聞いた上で、都合によつては、出来るだけの助力はしてもいいと思ひます。金が入るんなら少し位僕が貸して上げたついでい入ります。兎に角遠慮しないで何もかも僕に

打明けて呉れませんか。昨夕上野町へ行つた時から、妙に貴女の事が氣になつて仕方がないです」

かう云ひながら、彼は湯原の肥つた顔を憎らしく思出してゐた。お多代は稍呆氣に取られて、直ぐには返事をしなかつた。疑ひ深い目付をして男の方をそつと見てゐたが、やがて、

「私どうなつてもよろしいんですの」と、簡短に答へて、その話に立入りなくなつた。が、香取は最早打棄てしは置けなくて、相手の心にこびりつくやうな氣になつてゐたので、

「あの伯母さんは貴女にどうしろと云つたんです？」と力を入れて訊いた。「當分お屋敷へ御奉公に出るやうにと云ふんですけど……私最少し考へて見ようと思つてますの」

「お屋敷つて何です」

「彼家のお婆さんが昔御奉公してた家ですつて」とお多代は答へたが直ぐにそれを嘲るやうに、

「どんな家ですか」と言足した。

「其家なら昔阿波守様とか云つて、老中か何かしてた家です。お婆さんが時々其時分の話をしてゐましたよ。今でも年に一二度は御機嫌伺に行くんてせう。貴女ももつと早くなら、そんな家へ奉公するのがよかつたかも知ないけど……」

香取はお多代の口から、湯原との關係を訊きたがつても、流石に露出しにそれを訊くのは憚られた。で、自分が女に信用されて、女の方から打明けて訴へられるやうな機會を空想しながら、「どうせ貴女は湯原の家を出て行くんでせうが、その前に一度僕に會つて呉れませんか。僕の家へ來てもいいし、何處か外で會つてもいいです。僕の家へ來ると云へば、湯原君だ

つて何とも云やしないんだから。」

「え、一度お伺ひ致しませう、お差支えがなければ」と、お多代に軽く答へたが、やがて懐つてい調子で、「貴下は當分上野町へは入つしやらない方がよろ御座いますよ」

「何故です」と、香取は訝つたが、女の言ひかねたやうに黙つてゐるのを見て、獨りて吞込んで、「僕もあの家へは行きたかないんです。昨夕は仕方なしに行つたんだけど、もう行く必要はありませんよ」と、調子づいて云つた。

徒士町の踏切を越すと、最早道は盡さかゝつて、上野町の通は目の前に見えた。香取は一歩一歩其處に近くのを惜んで、飽氣なく別れる前に何か印象の強い事を云はうと思ひながら、その角まで來た。お多代は立留まつて、

「何方へ入つじやるんです？」と、別れを告げやうとした。香取は一足近して、

「公園の方から廻つて歸りませんか、天氣はいいし、もつと歩いたつていでせう」と、押迫るやうに云つた。

「でも、遅くなると、從姉が心配しますから」と、お多代は丁寧に挨拶しないで、躊躇せずに行過ぎた。振り返りもせず脇見もしないでスターク歩いた。

香取はその姿が消えるまで見送りながら、並んで歩いてゐた間に、チラ／＼目に觸れた目付や口元を一つ／＼鮮かに思浮べたが、それが、湯原に汚されてゐるかと思ふと思ふに堪へがたかつた。自分の肉身の者が悪漢の手にかゝつてゐるやうな氣もして、一刻も平氣で見えてゐられないやうになつた。そして、今から直ぐに何喰はぬ顔で湯原の家へ遊びに行つて、最一度様子を見たくなくて、その門の前まで行つたが、「當分來るな」と云つた

お多代の言葉を思出すと、入る譯にも行かなかつた。  
て、暫く溝渠の橋の上に立つてゐた。昨夕床屋で噂のあつた古着屋の裏  
の二階には、障子を取拂つて、派手な襦袢や夜具が冴えた日に曝されてゐ  
る。湯原の家の格子戸の前には幾つも古い足駄や下駄が干されて、其處に  
も日は流れてゐる。共同水道栓からは水が流れ出て、石崖へ滴つてゐるが、  
その周囲には人影はなかつた。黒く濁つた溝渠には脂が斑に浮いて、日に  
蒸されて厭な臭ひを放つてゐた。

(70)

廣小路の方の屋上の時計の、最早正午近くなつてゐるのを見ると、香取  
は急に腹の空つたのに氣付いたので、直ぐ電車の方へ歩いたが、このまゝ  
家へ歸る氣にはなれなかつた。何となくこの近所を立去りかねた。て、つ  
い近くの洋食兼業のミルクホールへ入つて、牛乳と西洋菓子と、堅いカツ

レツをも食へた。そして腹が膨れると、差當つて無すべきことも決せられ  
ぬので、知らず／＼公園の方へ足を向けて、展覽會場前のベンチに身を投  
掛けた。櫻の葉末は赤らんで、静かな風に散つてゐるのもあつた。彼れは花  
の散る頃、ある友人と此處へ來た時に、ふと一緒に話をしながら歩くのに  
堪へられなくなつて、わざと友人に別れて、人氣の少い所を志して、一  
人谷中の墓地の方へ行つたのがあつたのを思出して、聽て木枯に吹散らさ  
れさうな木の葉を眺め乍ら、過去つた月日を指を折つて數へた。  
そして、彼自身、あの頃から長い夜を通つて來たのに氣付いて、思はず心  
が騒いだ。一步步々世の人を離れて、自分の描いた幻影に取圍まれて住ん  
てゐたことが、不意味になつた。澄んだ空と穏かな光。このベンチに腰掛  
けて、誰れか自分の耳元で柔な懐しい言葉を囁いて呉れたらばと思つた。  
と、直ぐお多代の姿が目に見えて、心がそれのみ注がれ出した。

(71)

暫く目を瞑つて苦い取留めのない思ひに沈んでゐたが、ふと側に人の來た氣色がしたので、目を開けると、皮膚の黄ばんだ老人が擦れぐに腰を掛けて、怠さうに息を吐いてゐる。その息は香取の顔に觸れさうだつた。彼れは休息所を亂されたやうに感じて、つと立上つて、池の方へ歩いた。

(六)

歸るともなく家へ歸つたのは、最早軒燈の點く頃だつた。机の上には昨夕出した手紙の返事が二つ來てゐた。彼れは燈火も點けず夕暮の薄明で讀んだが、只何でもない事が書いてあるばかりで、別に心を惹くやうな文字はなかつた。て、それを反古籠へ投込んで、縁側に出て四邊の夕暮の騒ぎを聞いてゐたが、上野町の今時分の光景が闇の中に見えるやうだつた。

やうだつた。

「湯原はあの女をどうするつもりだらう？。ち多代は彼家を出てどうするつもりだらう？。今日の約束を守つて、この家へ訪ねて來るだらうか」それが打棄てられぬ大問題となつて、刻々に彼れの心に迫つて來て、それが極まるまでは、靜かに家に落着いてゐられさうでなかつた。て、何處へ行くかと云ふ當もなく、紙入を袂に入れて、夕餐の支度をしてゐる下女の目を忍ぶやうにして、そつと戸外へ迂り出て、思ひを散らすやうに急いで歩いた。

そして賑かな神樂坂の方へ足が向いたが、其處は縁日らしくて不斷よりも一層雑沓してゐた。彼れは次第に足を緩めて、夜店などを傍見してゐたが、毘沙門の境内の見世物小屋から、客を呼ぶ皺唄れた聲が聞えると、何氣なく其處へ近寄つ

た。

左右に汚れた小屋が向合つてゐる。

左の長い小屋には、鶏のやうな手足を備へた若い女が、さまざまの藝をし  
てゐる繪看板が掛つてゐる。右の小さい小屋には、入口に細長い爺さんが突立  
つてゐて、幕の内に鐵漿をつけた婆さんが坐つてゐる。そして婆さんの命令  
に應じて、幕の影から幼い細い聲が洩れて來た。

「生れましたは下谷竹町三十番地。お手々が四つてあんよが四つ……」

「これは新聞にも出ました因果な子供で御座います。今暫くの壽命ですか  
ら、息のある間に御覽を願ひます。」と、爺さんが後から付足した。

「これは麴町二丁目鶏屋の娘、親の因果が子に報い……」と、左の方でも  
木戸番が平氣な顔して叫んでゐる。濃い白粉と濃い臙脂で色取つた女の顔  
のみが幕の中に見えた。

(74)

香取は顔を背けて逃げるやうに其處を出て、堀端へ下りた。襦に包まれ  
た遠い燈火を見詰めて、生温い夜風に吹かれながら、今朝からのことを  
考出して、

「お多代だつて自分とは何の縁もない人間だ。昨日までは其處等を通つて  
ゐる女と同じやうに、一度も心に掛けたことのない女だ。そんな女のため  
に自分の大切な心を少しでも苦めるのは思ふことだ。どんな境遇に陥らう  
とも、自分の目で見さへしなれば、會ひさへしなれば、何とも思はな  
くて事が済んで行くのだ。また暫く彼方へ近づきさへしなればそれでい  
なのだ」と、自分で自分に言聞せて、何となく心の軽くなるのを覺えた。

そして、堀端に添うて歩いてゐたが、一日中諸方を彷徨いてゐたので、  
足は疲れて身體も懶かつた。何處か氣持りのいゝ部屋で、快く夕餐を食へ  
て、今朝からの無駄な思ひを消して、快い眠を得たかつたので、引つ返へ

(75)

して坂を上りながら、左右の飲食店に目を留めてゐたが、やがて雑沓の中を縫うて急いでゐる派手な姿を見ると、この頃嘗て感じなかつた女懐しい心が激しく起つた。四五年前に年上の友人に連れられて、この土地の待合へもよく来たことがあつたので、二三人の藝者の顔は今でも臍氣に記憶に浮べられた。

と、ふと、その一人がも多代に似てゐたやうに思はれ出した。で、彼れはその名を心の奥から捜出しながら、坂を横に外れて見覚えの待合の方へ足を向けた。

「やまと」と書いた軒燈が矢張元の家に出てゐる。が、彼れはその格子戸を開けるまでに、幾度も躊躇した。「其處へ入つて行つて何をするんだらう。あの女に會つたつてどんな話をするのだらう。云ひたいことも聞きたいこともありはしない」と、戸に手を掛けながらも、入ると極めかねてゐたが、

足音を聞きつけたのか、障子を細く開けて女が顔を出して、「何誰？」と聲をかけた。

香取は最後退りされかねて、すつと入つて行つた、女は燈火に透かして彼れの顔を見てから微笑して、「西野さんのお友達」と、帳場へ向つて小さい聲で云つた。

「この前を通つたから思出して寄つたんだよ」と、香取は言譯をしながら、導かれるまゝに二階の奥の部屋へ上つた。

女中は彼れの仲間が何時も長居はしないで手早く女を呼んで、直ちに歸つてゐたことを知つてゐて、茶を入れると、「誰れをお呼びになりますか？」と訊いた。そして、彼が西野と一緒に来た時分の馴染の女の名を思出さうとして思出せぬらしかつた。

「香取と云ふ藝者はゐなかつたかね」と、香取は訊いた。



「葛次さん？。あの妓はもうありません」女中は冷淡に答へた。

「おない」と聞くと、さも待焦れてゐた當が外れたやうな氣がして、他の女には會ひたくなつたが、このまゝ歸れもしないので、「ぢや、誰れでも呼んでお出で」と云つて、それから二三品食べたい物を誂へて、「飯だけ食へて歸つてもいいんだから、早くして呉れ」

女中が階下へ下りると、香取は横になつて疲れた足を伸した。階下では電話の音がして女を呼んでゐるらしかつたが、彼れは知らぬ女に會つて話をするのが煩はしく思れ出して、いつそ獨り此處で靜かに眠りたくなつた。近所の寄席の物音を聞きながら、ウト／＼としてゐたが、やがて驚いて醜い夢から醒めると、女中が西洋料理を持運んでゐた。食卓を拭きながら、「どうなすつたの」と、怪むやうに香取の顔を見て、「何だかお眠さうだね」

「どうもいけない。厭な夢を見て」と、香取は獨言のやうに云つて、目を据ゑて明るい部屋を見た。張交ぜの屏風には蜀山人の飄逸な字が際立つてゐた。

「どんな夢を御覽なすつて？」と、女中は目に笑ひを含んで何氣なく訊いたが、香取は眞面目になつて、

「此家へ入る時分にはうまく忘れたことが、夢に見えたんだよ。」

「へえ、不思議ですわね。どんなこと？」

「女のことだがね」と、香取は飽まで眞面目だつた。

「おや、お惚氣ですか」。女中は浮いた調子で云つて、「私何を仰有るのかと思つてたら」

「なに、惚氣なんかぢやないんだ」と、香取は忌々しさうに打消して、前に置かれたナイフとフォークを手にとつたが、何故だかこの女中にもあ

の話をして見たかつた。料理には手を着けないうで、女中の方へ向いて、  
「實は僕の知つてる女が、女房のある男に掛合つて困つてるんだよ。今は  
男の方でも關係を絶つつもりであるらしいし、女は尙更別れるつもりであ  
るらしいんだが、こんな場合二人とも綺麗に別れてしまへるだらうか。二  
人とも心残りがなく一生他人になつてしまへるだらうか。君はどう思う？」  
「どうですぬえ」女中はあまり氣乗りがしなうらしく、「お神さんがあつち  
や、どうせ別れなければなりませんわね」  
「だけど、それきりて済んでしまふものかね」  
「どちらかて惚れてれば、容易に切れないでせうよ」  
香取は進んで詳しいことを話さうとしたが、階下から女中を呼立てる聲が  
したので、自ら話が切れた。

女中が立つて行くと、彼れは皿を引寄せた。そして、知らずく今見た  
夢を繰返してゐたが、ふと氣付いて恐いほど淺間しく思はれた。お多代  
を憐むばかりでなくて、心の底は忌はしい執着が根を張つてゐる。湯原と  
の關係から、最早あの女には一生正當の色戀が許されぬやうになつてゐる  
と思ふと、尙更意地悪い慕はしさが増して來た……  
彼れはずつと以前、まだ頬の肉の柔く膨んでゐた頃、ある年上の卑し  
い女に迷はされて酷い目に會ひかゝつたのを、湯原の取爲して無事に濟ん  
だことがあつたが、その折の光景が今の心持に照らされて耻かしく浮かん  
で來た。

「二度とあんな眞似はしたくない」彼れは自分の心一杯の思ひを無理に  
壓潰さうとした。そして長い間女といふ女に近寄らなかつたために、こん  
な事で惱むやうになつたのではないかと思つたりした。

食事の終つてナイフを投出した時分に、足音が襖の前に留まつて、藝者の姿が珍しく彼れの目に映つた。近寄るのを見てみると、今雑沓の中でチラ／＼目についた女のやうな水々しい美しさはなくて、藝者らしくもなかつたが、黒い髪と白い顔とには、流石に若い女らしい艶があつた。

「何故さう顔ばかり見てゐらしやるの」と、女は面映さうにした。

「よく見ると不思議だよ、今夜かうしてお前に會つてゐるのが僕にや不思議だよ。僕はこの春から女を絶つたんだからね」と香取は眞顔で云つた。

そして、この女によつて戒を破つた後が氣遣はれて、このまゝで歸らうかと迷ひながら、

「お前は何時から此地へ出てゐるんだい」と、訊きたくもないことを訊いた。

「まだ出たばかりですわ。二月ぐらゐでせう」

「些とはお馴染が出来たかい」

「いゝえ、お馴染なんかありませんわ」

「でも二月の間にや、随分いろんな客に出てゐたらう」

日に三人としても三千六百人だと、香取は其處まで考へを持つて行つて、側にゐる女の身がいろ／＼の男の毒を盛つた器のやうに思はれ出して、藝者と云ふ名や、派手の色合も、快い浮いた逆想を起させなくなつた。

「よく厭にならぬね」と、笑ひながら云ふと、

「厭だつて仕方がありませんわ」と、女は窮屈さうに答へた。

そこへ女中が襖の外から聲を掛けて、次の間へ案内した。香取は明るい部屋から薄暗い間へ入つた。女は燈火の下で捌けない話をしてゐるよりも、結句氣樂になつたやうな風だつた。

やがて、香取は枕許の細いランプをも消して闇にしてしまつた。そして

再び明處へ出るまで、空想の女としてその女に觸れてゐた。お多代の顔や肌が闇の中に描かれてゐた。

(七)

彼は身體中汚されたやうな氣がして、やがて其處を出ると、急いで家へ歸つて、風呂へ入つて念入りに皮膚を磨いた。

そして机に向つて、所在なげに美しい詩のやうなベニス貴婦人の物語を讀續けたが、紙の上には生きた女の影のみ差した。最早戒を破つた僧のやうに、卑い慾望は以前よりも却て力強く心に渦捲いて、動もすれば想像がその方へのみ向いた。燈火を消して早く寢床へ入つて、つとめて眠を得やうとしたが、淋しい部屋は不斷よりも一層淋しくて、誰れか側にて呉れ

なければ、安んじて眠れさうでなかつた。て、ふと起上つて、寢卷のまゝ茶の間へ行つて、長火鉢の前に坐つた。そして古足袋を繕つてゐる下女に言付けて、茶を入れさせながら、

「今夜は淋しくて仕方がない」と、同情を求めるやうに染々と云つた。

下女は不思議さうに主人の顔を見上げて、「今夜は感心にお隣の子供が泣かない」と、それが淋い原因である様に云つた。

「お前はよく淋いと思はないてゐられるね、毎日何を考へてるんだい」

「何も考へることは御座いませぬ。仕事でもしてゐませんと、居睡がついて困りますけれど」

「考へることがないかね。こんなに暇で淋いと、お前も毎日何か考へてるだらうと思つてたのに」

「奥様がないと、どうしても家の中は淋う御座いますよ」と、下女は力を

入れて云つて、長火鉢を隔て、差向ひに坐つた。そして何時かのやうに眞面目に結婚を勧めたさうだつた。

「一人ぢや暮せないものかね。おれはどうかして一生一人てゐたいと思つてたけれど、かう淋くつちや、生きてるよりや、死んだ方がいゝと思ふよ。實際夜中に目が醒めた時分にや、明日の朝日を見る前に死んだ方がいゝと思ふことがある」

「え」と、下女は目を丸くして、「あまり御勉強が過ぎるから根が疲れるんでせう」

「勉強なんかしてやしないよ。おれも今にまた働かなくちや食へなくなるんだが……」

「これで奥様がお出来になつたら、何をなさるにも張合ひがあつてよろしうですよ」

「だけど、おれなんかには碌な子供は出来なからね」香取はふと毘沙門て見た不具者を思出して、「手が四つて足が四つの子が生れたらどうするだらう」

「まあ厭な。そんな子が滅多に生れる者ですか、何故そんな事を仰有んでせう？」

「しかし生れんとは限らないさ。おれの知つてる金持の娘で十八で盲目になつた女があるよ。父親の梅毒が傳染つてたんだらう」

「それは親御が悪いんで御座いますよ、普通の者なら貴下……盲目の生んだ子でも、目がちやんと明いてるんですもの」

「さうかねえ。お前なんか何事もさう極めて安心してゐられるかね」

香取は世の中で自分一人がこんな下らん事に悩んでゐるのか知らんと、下女の羨びた顔を羨ましさうに見てゐた。

そして、茶を飲んで煙草を吸つて、暫く下女と近所の噂などしてゐた。さうしてゐると、幾らか心が鎮まるやうなので、夜の更けるまでもつと茶の間にもたかつたが、下女が次第に眠たげな顔をするのを見ると、強ひて話相手にするのが氣の毒になつて、自分の居間へ歸つた。

翌朝も穏かな温い日が照つた。彼れは縁側で日向ぼつこしながら、隣の軒先に羽を光らせてゐる雀を見てゐたが、ふと氣付くと昨日の瘦せた小犬が庭の片隅に目を細くして、氣樂さうに前足を伸して蹲まつてゐる。何時の間に歸つて來たのかと怪んで、下女に訊くと、下女は些とも氣付かなかつたと云ふ。

「變な犬だね、よくこの家を覚えてたものだ」と、彼れは庭へ下りてその側へ寄つたが、小犬はやがて身を起して、其處等を嗅歩き出した。

「も一度何處かへ棄て、來てやらう」と、獨言を云つて彼れは身仕度した。そして、犬を誘ひながら表通へ出た。後になり前になりして江戸川に沿うてフラ／＼傳通院近くまで來たが、其處から伴を振捨て、急に電車に飛乗つた。

何處まで乗つてゐやうと云ふ氣もなく、目を瞑つて窓に凭れてゐたが、何時の間にか電車は廣小路へ來て停つた。と、彼れは豫め其處を指して來たやうに慌て下りて、溝渠の方へ歩いた。

昨日この邊りへ來てから僅か一日しか立つてゐないのに、餘程の日數を經てゐるやうに思はれて、上野町の家模様もあれから著しく異つてゐるさうな氣がした。

お多代はまだゐるんだらうか。湯原の留守に女同士がどんな風にしてゐるんだらう？。彼れは怖い者に近づくやうにその家の前まで行つた。玄關

には明い日が差込んで、中には人の聲がしない。で、思切つて聲を掛けて入つて行つた。

「はら」と、問を置いてお多代が返事をして、奥から出て来たが、香取の顔を見ると、驚いた様な目付をした。そして、後に氣を兼ねながら挨拶して茶の間へ通した。

「奥さんは？」と訊くと、

「居ますよ」と云つて、お多代は身を擦寄せ小聲で、和泉町へ行つてゐたことは秘密にして呉れと頼んだ。

香取は首肯しながら寛かに坐つて、次の間に目を付けてゐると、妻君は先日よりも晴々しい顔付をして、襖を開けて、「此方へ入つしやい、元一さん」と云つて、自分が先に立つて、玄關の脇の座敷へ導いた。

座敷には縁の壞れた柳行李が出してあつて、帯だの袴だのと女物がそ

の側に散らかつてゐる。澁紙包みも一つ轉がつてゐる。一目見ると香取は略ぼ感付いて胸を轟かせたが、何氣ない風で、

「それはどうしたんです」と、妻君に訊くと、

「私もう此方をお暇して神戸へ行くんですよ、今夜の夜汽車で立たうと思つてますの」と、お多代が答へた。

「今夜？……そんなに早く立つてですか」と、香取は驚いて、お多代の顔を見詰めた。これほど心に掛けてゐる自分に一言も告げないで、不意に立つて行かうとするのが恨めしかつた。そして、神戸へ行つてからの事を訊きたかつたが、言出す力もないほどに心が萎れた。どうせいゝ事があつて行くとは思はれないが、この女の將來はどう落着くものだらうかと、暫く口を噤んでゐるが、妻君は行李を隅へ押除けて坐つて、

「私達もいゝ家があつたら、他處へ引越さうと思つてゐるんですよ。その中

空家捜しを兼ねて、元一さんのお家へも邪魔に上るかも知れませんが」と、懐つこさうに云つた。

「え、是非入つしやい」と、香取は卒氣ない聲で云つて、最早妻君の側にあるのも厭になつたが、妻君は不思議に調子づいて、知人の噂などし出した。香取は氣乗りのしない受答へをしながら、つい相手の口からお多代に關した事が漏れはしないかと待設けてゐたが、それらしい話は只の一言も出なかつた。で、終ひには焦躁しくなつて、座を立つて歸りかけて、

「お多代さんは神戸へ行つて何をされるんです？」と、訊くと、

「行つて見なけりや分らないんでせう、何をされるんだか」と、妻君は簡單に答へた。

「どうですか」と、香取は見送つて出たお多代に向つて、「兎に角もう會へんのですね」と、口元に淋い笑ひを浮べた。

妻君に妨げられて、離別の言葉さへ云へないのを殘念がりながら、其家を出て、昨日のやうに公園の方へ歩いて、昨日のベンチに腰掛けた。

あの行李と濫紙包とを持つて、女一人夜汽車で東京を去つて、確な目的もない土地へ赴く……彼れは心をその一點に凝らして、夜更てからの停車場や、神戸までの途中の驛々を描き出してゐたが、ふと出立の時刻を聞かなかつたことを悔ゐた。分つてゐれば人知れず見送つてやるんだが。

暫くして彼れは、再び上野町の溝渠の側を通つて電車に乗つて、最早明日から此方へは近づかないと決した。そして、お多代を中心にして湯原夫婦や戸田の妻君が、それづくに秘密を持つてゐるらしいのが心に掛つたが、その秘密はつひに晴れさうではなかつた。

で、二三日、香取は人間の秘密を底氣味悪がつて、稍もすれば心を戦かせた。毎日空はよく晴れてゐたが、戶外へは出ないで、部屋の中で身動き



もしないほどにしてゐた。湯原に誘はれてから、二三日目に觸れた、いろんな人の顔を忘れやうとしてゐた。

(八)

三日目の朝珍しく郵便の聲が聞えた。自分で立つて行つて手に取つて見ると、封筒の裏には所を書かないで、樋口多代とのみ書いてある。胸を轟かせながら、ふと消印に目をつけると、それは本郷であつた。封を切つて慌だしく讀んだが、假名が多くて、文句が分り難かつた。

「都合によつて神戸へは行かないで、此處に間借りをして、一人て暮して居ります。お次手もあらばお遊びにも出て下さい。晝間だと何時でもお目にかゝれますから、是非お話し申したいことがあります、一度お訪ねし

たいとは思つて居りますが、人目が憚られて差控へて居ります……尙私か東京にゐることは、誰れにも内所にして下さるやう呉々もおたのみ申します」といふ意味の文面が、二三次讀返してから、やうやく判ぜられた。巻紙の端には、追分町八代とら方と菊屈さうな字で書添へてある。

香取は意外なこの手紙を見て、生返つたやうに悦しかつたが、机の前に坐つて落着いて考へてゐると、疑惑は留度なく起つた。何が何やら譯が別らなくなつた。

で、直ぐにも様子を見ないでは安んじられなくなつて、その住所を口の中て繰返しながら戶外へ出た。四邊に目を散らさずに足早に歩いて追分町まで来た。二三人に尋ねて漸くその家を探し出したが、表の古ぼけた門の戸は鍵が掛つてゐるのか、引いても押しても開きさうでない。怪んで、竹垣の壞れ目から覗くと、縁側の雨戸は開いてゐる。庭にゴスモスの咲い

てゐるのも見えた。

聲を掛けるのも憚られて、遠廻りして裏口を捜して見たが、外に出入口はなかつた。他所の二階家が背中合せになつてゐる。て、表へ戻つて試みに二三度軽く門を叩いたが、内から何の手應へもない。留守か知らんと思つて歸りかけたが、後髪を牽かれるやうな氣がして、思はず手強く門を叩いた。すると、「何方？」と聲がして、やがて内から人の近づく氣色がした。その聲と足音とはお多代に違ひなさうだ。

「あら」と、お多代は門を開けて香取の顔を見て驚いて、「貴下とは思ひませんでしたよ。手紙が届きましたか？」

「え、僕も何だか氣掛りだから直ぐ來たんです」

「よく來て下さいました」お多代は謹しやかに云つて、家の中へ連れて入つた。

今まで晝寐してゐたらしく、座敷には女枕と薄い掛蒲團が出してあつた。お多代はそれを急いで片付けて次の間から小さい汚い座蒲團を持つて來た。香取は坐るが早いか性急に、「貴女は何故神戸行を止めて此家へ移つたんです」と問ひ詰めた。

「急に考へ直しましたの。神戸へ行つても目的がないんですもの」と、お多代は言譯して、「だけど、従姉や戸田さんには、神戸へ行つてるとにしてるんですから、何卒何も仰有らないで下さいまし」

「え、その心配は入りませんよ。僕はもう彼方へは行かないんだから……しかし、貴女は此家で何をしてるんです、何もしてゐないんですか。一體此家は何をする家です」と、香取は胸に込上がる疑ひを一時に晴らさうとして、疊掛けて訊いた。そして、部屋の中を見廻した。

お多代は莞爾りして、「今ゆつくりお話いたしますわ」と云つて、次の間

へ入つたが、暫くして茶盆と菓子鉢とを持って出て来た。亂れた髪を解付けて顔も洗つて來たらしかつた。先日よりも顔に艶があつて生々としてゐる。香取はその紅い唇に目を留めてゐた。

「今日はお留守番をさせられてるんですよ。此處の主人は呉服物の出商ひをして、昨日から田舎へ行つてますの。早くても二三日しなれば歸らないんでせう。お神さんはゐるんですけど、随分弛慢のない人なんですよ。昨日も主人が出て行くと、直ぐに隣近所へ遊びに出歩し、今日も留守の間に生命の洗濯をするんだつて、親類の娘を誘つて芝居を觀に行つたんですよ」

と云つて、お多代は月十圓の食料で、この座敷に置いて貰ふことになつてゐることや、その中自分に相應しい仕事を捜して、一人立ちで東京で暮すつもりでゐることなど、ポツ／＼話して一人の世話になるよりや、その

方が餘程氣樂だと思ひますわ。此處へ越して來た日から氣分が清々するやうですわ。お神さんがゐないと話に來る人もないから、私一人の家のやうですよ」と、これまでにない打解けた様子を見せた。

香取は心を留めて聞いてから、暫く黙つて考へてゐたが、やがて、「ただ今この所困つてもゐないんですか。湯原君が少しは世話をして呉れるんですか」

「いゝえ、義兄が何で貴下」と、女は目に角立て、慌く打消して、「私もうあの人達の世話になりませんの」と強く云つた。

「しかし、湯原君は貴女に對して責任があるんでせう、此家にゐることは知つてるんですか」

「いゝえ、義兄にも知らせませんの。神戸までの旅費を貰つて俵で出て、途中から逃るやうにして此處へ來たのですわ。私がかんな所にあることが

知れたら、どんな目に會はされるか知れせんわ」と、女は憎えたやうな顔付して、一寸言葉を切つて、「ですから、誰れにも知らせたくないんですけど、差當つて宿の保証人に困つてますの。私前金で食料を入れてるんですから、保証の必要はないだらうと思ふんですけど、此處の主人が舊弊で、四五日中にどうしても宿受を極めて判を捺して出して呉れと云ふんです……その事で貴下にお願ひしたいんですが、御迷惑ですわね」

「いや、保証ぐらゐ何でもありません、どうせ形式的に過ぎんのだから」と、香取は直ぐに受合つた。そして女が湯原の毒手から離れて自由の身となつたことが、他人事とは思はれぬほど悦んで、貴女はいづれ將來の事も考へてゐるんでせうが、人に騙されんやうになささい。僕は何だか貴女が氣の毒でならんから、出来さへすれば力になつて上げたいんです」と、眞面目で云つて、湯原との事を訊きたさうにした。お多代は後目たいとなど、鶉の毛程もな

かつたやうに空呆けてゐたが、やがて

「私從姉さんには随分意地められたんですよ」と、口を切つて、訴へるやうに話し出した。

「元を云へば、私の方から無理に頼んで御厄介になつたんぢやないんですからね。此方は無人なのに從姉さんが身體が悪いし、人手を借りるにしても、全くの他人だと氣骨が折れるから私には是非來て呉れ、當分家のお手傳ひをするつもりで來て居れば、その中一生東京で暮らされるやうにしてやるつて、それは幾度も手紙を寄越したんですの。私、餘程迷つたんですけど、終ひには断はれなくなつて、決心して來たんですわ。近所の人にも暇乞ひして、一生東京の人になるつもりで來たんですからね。それに難癖付けられて追返された日にや、私故郷の人に會はず顔がないやうな氣がしますから、どうしても歸らないつもりでゐますの。持つて來た衣服まで無

くして、こんな服装で歸られはしませんわ」

さう云つてゐる中に、今まで平氣だつた顔を曇らせて、涙をさへ浮べた。「私彼家へ來てから彼此一年になりますけど、下女がはりに追使はれてたばかりで、些とも自分のためにはなりませんしてわ。滅多に外戸へも出られないんですもの。今年の一月でしたか、戸田さんのお婆さんや貴下に新富座へ連れてつて頂いたせう。あれつきり物見遊山に出たことはありませんわ。それはまあどうでもいゝんですがね。東京へ來た位なら何か習つて身に藝をつけたいと思つてるんですけど、そんな事にや些とも構つて呉れなかつたんですの。私欺されたんですわねえ」と云つて、淋しく笑つて、「東京へ來てから手だつてこんなに荒れちやつたの」と、白い華奢な手を出して見た、

が、その手は少しも荒れてはゐなかつた、香取の目にはこれまで自分が

觸れたどの手よりも美しく見えた。

「私もう懲りくしましたから、これから誰れをも依頼りにはしませんの。どうせこの年齢まで苦勞ばかりして來たんですから、どんな苦勞だつて辛抱出來んことはありませんの」と、暫くして浮々した調子になつて笑顔を以て、「これからも時々遊びに入つて下さい。私の身もその中どうなるか分りませんが、當分此處を自分の家にしとかうと思つてますから」と云つて、身輕に立つて、障子を開けて「汚い家だけど、静ていゝでせう、庭もあるし。あの壊れかけた門を見ると、私田舎の家を思出すんですよ」そして、お多代は縁側に立つて、外を見ながら、「本當にいゝお天氣だ」と

呟いた。

自分の今の境遇を悲んでゐるのやら、ゐないのやら、香取は女の心の奥を少しも索りかねて、思案してゐたが、やがて、自分も縁側へ出て、女の

目を向けてゐる方へ目を向けてゐると、自ら田舎の家が思出された。

不思議にも、十一二の時分秋の夜、隣家の門の側に熟つてゐる棗を盗みに行つて、脊の高い友人の肩車に乗つて、門に登つたと思出された。そして、棗は枝が遠くて取れず、門は下難くて泣き出したことがあつたが……

「何だか田舎染みてますね、この家は」と、彼れは其處に昔の幻を見ながら、感じを籠めて云つた。そして、眩しさうにして端近く立つてゐる女を見上げて縁側に腰を掛けた。古ぼけた門や色の朽ちた竹垣や、ユスモスの淡い花の色や、愁れげな女の顔の色が、冴えた光の中に浮上つて夢のやうに見えた。珍らしく安らかな夢心地になれた。煩はしい世を逃れたベニス貴婦人の宿へても來てゐるやうに思つても見た。そして、女の身の上についての立入つた疑惑は暫らく忘られて、只かうしてゐれば、自から心が平穩になるやうだつた。で、

「もつと遊んでこもいゝんですか、僕がゐても迷惑にならんですか」と、何氣なく甘えるやうに云つた。すると、

「何故です」と、女は不快な目付して「何時までゐらしても些とも迷惑ぢやありませんわ」

香取は自分の言葉が女の顔色を變へさせたのを悔いた。

「私一人ですから、晩まで遊んで入つしやいな。もうお正午ですから、御飯でも食上つて……」と、女は臺所の方へ行きかけた。

香取はふと思付いて、後から追つて行つて、幾らかの金を強ひて手渡しして、何か近所で出来る甘い物を逃へて來さすことにした。女は黄い羽織を引掛けて出て行つたが、暫く手間取つて來て、「親子井を云つて來たんですよ、貴下も好き？」と訊いた。

「え、好きです」

香取は女が自分の家のやうに食事の仕度をしてゐるのを楽しんで見てゐた。そして、一緒に食事をしながら、ずつと以前にあの女と同じ鍋を突いてゐた以來、今日ほど楽しんで箸を執つたことのないやうに思はれたので、無邪氣にそれを口に出して云つた。

「従姉さんから一度そのお話を聞きました」と云つて、女は可笑がつて、  
「今はお會ひなさらないの、その人に」

「もう會ふものですか。もう女なんかに入りはしませんよ、馬鹿らしいから」

「それはさうですわね」  
「だけど、女の友達は一入欲しいと思ひますよ。人の妻君でも何でもいから、自分の心を撫て、呉れる者があつたらと思ひますよ。湯原君の妻君なんか元は姉か母親のやうな氣がしてたけど、此頃は、厭な人間になつち

まつた。女て者は世帯苦勞するとあんなになるものか知らん」

「厭ですわね、あんなになつちや」と、女は眉を擡めたが、それを取消すやうに、「だけど、悪い人ぢやないんですよ。誰れにも悪氣のある人ぢやないんですよ。病氣なんてせう」

「子供がないからかも知れん、一度出来かゝつてたんだけど……」

「さう」と、女は軽く云つて、「貴下はお家でどんな者を召上つてるんですの」と、突如に訊いて話を外すやうにした。

「何故です」と、香取は女の問ひ方の變なのを怪んで、「湯原君の家のとさう違つてはゐませんよ、普通の物ばかりです。あの家でも拙い物ばかり食てるやうですね」

「えー」  
女は何か氣に掛つてゐるらしく、ハキ／＼話を進めなくなつた。香取は

氣に留めぬやうに装ひながら、相手の顔を見詰めて、秘密を持つてらし  
いその心の底が、隈なく明るくされないのを焦燥しがつた。が、先方で避  
けてゐるのに、あまり諄く訊くのも意地悪く取られさうに氣遣はれたので、  
何時か自然に女の口から明されるのを、氣永く待つてゐやうと思つた。宿の  
受人になるのは、女と自分との關係を付けて置くために却て都合がよかつ  
た。

で、彼は半紙に細く箇條書きにして何か書付けてある證書を女から受  
取つて、碇に読みもしないで、「印を捺して直ぐ郵便で送ります」と、蠟ん  
で懐に入れやうとしたが、女はふと手を伸してそれを取返して、

「随分勝手な事ばかり書いてあるんですよ」と、披いて見せて、所々指差  
しながら「宿主の都合次第で断つた時には三日以内に立退いて呉れとか、  
部屋を汚したら相當な辨償をして呉れとか書いてあるでせう。それに借手

の方から一月以内に出て行くと、間代は拂戻さないなんて、随分勝手過ぎ  
ると思ひますよ」

「さうだね」と、香取は一通り軽く目を通して、「こんな事を書いて、も、宿  
料さへ拂つとけば何も面倒なことはないんですよ。宿料を滞らせて逃  
してもすると、受人が責任を負はなくちやならんだけと……しかし一月  
分なら、僕が引受けたつてい」

「ちや、私夜逃げをしますよ、此處が厭になつたら」

「え、その時は葉書を送つて下さい。僕が跡片付に来るから」

「それは戯談ですけど」と、女は調子を變へて、「此處のお神さんには何か  
遣らなくちや悪いでせうね」

「そんな事はどうかだつてい」

「さうですか知ら。だけど私の性分では何か心付けをしなければ氣が濟ま



んのですよ。それにかうして家の者のやうにしてるんですから」  
「ぢや、幾らか包んでやつたらいいてせう」と、香取はそれを機会に紙入から紙幣を取出して、「この中で貴女の氣の済むだけ遣いなさい。澤山遣る必要はないんですよ」と、女に手渡し、やうとしたが、女は押返して、手を振つて

「そんな物いいですの。私いよく困つたら、貴下にも願ひしてお借り申しますけど、まだ當分は構ひませんの。」

「まあいゝから取ときなさい」香取は紙幣を疊の上に置いて立上つて、

「僕はもう歸りますよ。非常に長居をした」と、云つて戶外へ出て行つた。

そして、半日を其家で送つて金をも置いて來たゝめに、先日からの鬱陶しい心が稍々軽くなつたやうだつた。

(九)

家へ歸ると、直ぐに證書に捺印して送つたが、それに添へて「あまり屈托して身體を害はぬやうになさるべし」と書いてやつた。折返して女から簡單なお禮の葉書が來た。

女はその用事ばかりで手紙を寄越したのかも知れぬが、香取の心にはその日から多代の身體が暗く明るく絶えず映つてゐた。氣分のいゝ時には女の姿が晴々しくなつて、今の境涯が却つて安らかなやうに見える、心の沈んだ時には女の姿も憐れげになつて、その日々の生活が前よりも痛ましさうに見えた。或夜も眞夜中に不快な眠からふと目を醒ますと、女が寢床に坐つて、胸に手を當て、悄然首垂れてゐるやうに思はれたり、青い顔して泣いてゐるやうに思はれたりした。湯原の妻君の剃刀騒ぎも思出されて、思

詰めると、女は誰れてもあゝなるのかも知れないと、恐ろしくなつた。「夜逃  
げてもしたら」と先日戯談らしく云つた言葉までも、女の心の底を微めか  
してゐるやうに取られ出した。

で、果しない妄想の湧上ると堪へられなくつて、燈火を點けて机の前に  
正坐して、煙草を吸ひながら、つとめて心を落著けやうとしてゐたが、や  
がて、巻紙を廣げて、自分の思つてゐることを、遠慮なく細に書出した。  
自分の想像に浮んでゐるこれまでの女の所行を責めたり悲んだり、將來を  
戒めたりした。自分はあの時から憐れなる貴女を一刻も念頭から去つたこ  
とはない、思ひ出すと立つても坐つてもゐられぬと書いたり、「貴女は最早  
純潔な女としては通れぬ身だから、たとへ糊口の道はついたにしても、こ  
の先幸福に眞直な生涯は決して送れぬこと、思ひます」と、わざと嚇すや  
うに書いたりした。

「……貴女が田舎から出て来るやうになつた事情や、此方へ来てからの事  
を考へると、悪運に取付かれてゐるやうに思はれます。一生とてものがれ  
る事の出来ない恐ろしい者に付纏はれてゐるやうな氣がします。貴女ばかり  
ぢやない、私だつてさうだ。私は戸田の妻君などの云ふやうな氣樂な人間  
ではないんです。毎日淋い手頼りない日を送つてゐます。丁度貴女のやう  
に……これまでいろ／＼にして悪運に攫まらぬやうに遁げて來ましたが何  
時かは酷い目に會はされさうに思はれてならない……」。

自分の感想染みだたことも、秩序なく書續けてゐる中に、長い巻紙も盡  
きてしまつた。それをお多代に宛て、出す氣にはなれなかつたが、只女を  
目に浮かべて、思ふ事を書いてゐると、自から心が紛れた。

で彼れはそれを一度讀返して、机の上に擴げたまゝ、燈火を消して寢床  
へ入つた。すると夢ともなく、現ともなく、誰れか側にて、頻りに自

分を詰つてゐるやうな氣になつた。

「東京へ来てから幾度もお目に掛つてゐるのに、何故その時早く私を助けて下さらない。あの時分に何故見向きもなさらなかつたのです？」

「今になつて焦慮したつてそれが何になりませう？」

「あの時貴下が何も云つて下さらないからだ。私の方で幾ら思つていも、女の方から云出されはしません。もう此世では貴下との縁はないんです。まだ同じやうなことを云つてゐたが、その人はお多代らしくない悪相を帯びた女だつた。香取は押潰されるやうな苦みを感じて、目を醒まして起上らうとしたが、身體は快く眠つてゐるのか、少しも自由にならなかつた。

朝目を醒ますと、枕許の手紙が昨夕の苦い夢の名残として先づ目についた。彼れはそれを忌はしい者のやうに力強く引裂いたが、いくら裂いても

裂け切れぬ者が部屋の中に残つてゐるやうだつた。

長く續いた秋日和は今日も變りさうではない。暫く氣付かぬ間に北隣の庭の楓葉の眞紅に染んでゐるのが、隙間からチラ／＼目についた。彼れは自分の部屋で呼吸をするのが重苦いやうで、遠く戶外を見てゐたが、高く低く屋根から屋根が何處までも續いて果しがなかつた。そして、家もない人もゐない野原へ只一人逃げて行つて、心に蟠まつてゐる人影を消してしまつて、自由に息をしたいやうな氣がして、表へ出て行つた。

が、彼れは走つてゐる電車を見ると、それに背いて淋い方へ足を向けられなくなつて、考へる間もなく飛乗つた。上野町へ行つても多代の出た後の様子を見て来るか、追分へ行くか、この二つの外に差當つて訪ねたい家はなかつたが、三丁目まで来ると、つと電車を下りて、脇目も觸らず追分まで歩いて、かの床しい古い門を入つて行つた。目の細い肉付のいゝ頬の

テカ／＼してゐる四十格好の主婦が庭に立つてゐた。

「お多代さんはおますか」と訊くと、不思議さうに此方の顔を見て、

「樋口さんですか」と問返して「おますよ」と冷淡に答へた。

その聲にお多代は障子を開けて微笑したが、目を浴びたその顔は先日よりも蒼く見えた。香取は縁側から座敷へ上つたが、机の上の薬瓶が先づ目についた。

「何處か悪いんですか」と、氣遣はしやうに訊くと、

「悪いつて程でもないんですけど、胃が少し悪いんですの」と云ふ。

「家にじつとしてゐるからせう、少し散歩でもしちやどうです。こんな

天氣がいゝんだから」

香取は突立つたまゝ、今直ぐにも外へ誘ひ出したさうにしたが、女は慵がつて立たなかつた。そして、二度三度勧めると、さも厭さうな顔をする

ので、香取も強ひかねて、其處に腰を卸した。女は先日ほどハキ／＼しないで、あまり口數も利かなかつた。遊びに來られたのを喜んでゐる風も見えなかつた。が、暫くして、ふと、

「貴下はあれから下谷の方へ入つしやらないのですか」と、意味ありげに訊いた。

「一度も行きませんよ、何故です？」

「私が東京にゐることが皆なに感付かれてるやうなんですの。戸田さんてもさうとばかり思つてるらしいんですよ」

「何故？。だつて誰れも知らせる人はないんでせう。僕は寄付やしな

し……」

「それはさうですけど」

香取は自分の所爲ではないと飽まで辯護して、「此處にゐると知れたら困

るんでせう。そしたらどうします？」

「仕方ありませんわ、私も覺悟してますの」と、女は態と平氣らしく云つた。

「覺悟つてどう覺悟してらんです」彼れは自分の上にも危険の近づいてるやうに感じて、力を入れて問詰めた。

「貴下どうしたらいいと思つて？」女はふとこれまでにない馴々しい甘えた言葉で、目に媚を浮べて云つた。

「やめ」

香取は眉を蹙めて、白い歯で唇を噛んで一圖に考込んでゐたが、やがて、「僕も場合によつちやどんな責任を負うてもいいです。貴女が神戸へ行かないで東京にゐるのを、僕の所爲にしたつていいんです。そのために僕が不名譽を得たつて構はない」と言切つた。そして、最早自分とは、正當

な戀中にはなり得ない女のために、知人間に名譽を失つて物笑ひの種になるのを心苦く思ひながら、その苦みは何となく懐かしかつた。二人の間の隔りが取れて、これまでのやうな遠慮氣がなくて、女を見てゐられるやうになつた。

「私が無理に貴女を勸めて引留めたとしとけばいいでせう。何處か途中に出會つたとか何とか口實をつけて……僕も責任を以て貴女を一人立ちで暮らして行けるやうにすると受合つてもいいんです。今度湯原や戸田の妻君に會つたら、私の方からさう云ひますよ。その代り貴女もそのつもりで、この後あの人達に非難されないうやうに注意しなくちやなりませんよ。」

「え」と、女は軽く答へて、「だけど、可成貴下からは何も仰有らないで下さい。却て御迷惑になりますから」

「しかし、貴女も逃隠れして心配してるよりや、いつそ明ら様にしといた

方が氣樂ぢやありませんか。僕も今となつちや、もう自分の迷惑なんか構ひませんよ。それに貴女と私との間には些とも疚い事はないんだから」と、香取は次第に感情を昂ぶらせて、「僕は先日貴女に會つた時から、毎日いろんな事が考へられて仕方がないんですよ。折角落着きかけてた心がまた痛み出して仕方がない。あの時湯原君を送つて上野町へ行かなければよかつたのに……矢張僕の身にや悪運が取付いてるんだ」と、歎息した。

が、かうなつた上は最早どう云ふ結果にならうともそれを考へてはゐられない。お多代と離れては淋くて暮されさうてはない。このまゝ身の破滅にならうとも、二日でも三日でも二人で、恣な晝と夜とを送りたかつた。男の愛情のある哀れげな言葉に感動したのか、女の瞳も涙に濡れてゐた。香取もそれを見ると涙ぐんだ。そして二人は暫く黙つてゐた。主婦は庭の方から不思議さうに此方を顧みて聞耳立てゝゐる。

(120)

「私、何も彼も貴下にも話したい」と、お多代はふと溜息吐いてから云つた。

「何をです」と香取は胸騒ぎさせて顔を上げて、「何をです」と強く云つて、恐ろしい言葉を待設けたが、

「今直ぐも話は出来ませんわ」と、女は首垂れた。

「だけど、それを聞かなけりや、僕は安心が出来ませんよ。……今でなければ何時話すつりなんです」

「何時と云つて」と女は言淀んだが、やがて、「では後で手紙に書いて出しますわ」

「手紙は直ぐ呉れますか。成べく細く書いて送つて下さい、隠立てをしな

すよ」

「え、」

(121)

「それから葉書でも毎日の様子を知らせて貰えるといふんだが。貴女の方で異つた事情が出来ると、僕は直ぐ来て見ますから」

お多代は眞心を籠めた男の言葉を聞きながら、氣乗りのしない返事をし  
てゐたが、「では私困つたことが出来たら、貴下にお知らせしてよ。困つた  
時に人に頼むのは私厭ですけど」と、やがて決心したやうに云つた。

「それは他人にはうつかり依頼しない方がいゝんですよ。だけど、僕を兄  
妹とも思つてたら信用して打明けられるでせう」と云つて、香取は突如  
に、「貴女は今幾つです？」

「年齢を訊いてどうなさるの。私もう二十二になるんですわ」

「ぢや僕とは五つ違ひだ。矢張僕の方が兄だよ。何だか僕が弟のやうな  
氣がするけれど」

「私そんなに老けて見えて」と、女は不快らしい顔付をして「上野町に—

年ゐたばかりでこんなになつたんですよ」と怨めしうに言つた。

「些とも老けちやゐないさ。東京へ来た時よりや若くなつたぐらゐですよ、  
綺麗にもなつたし」と、香取は眞顔で見詰めた。

「綺麗だなんて。眞面目に聞いてれば愚弄つて居つしやるんだわね」と、女  
は面差さうにして、口元に微笑を含めた。

「愚弄ふもんですか。僕は本當にさう思つてる。去年初めて見た時分にや、  
色の白い女とは思つてたけど、何處か田舎臭かつたが……」

「どうせ田舎物ですもの、私なんか」

「だけど、今はあの時のお多代さんとは思へませんよ。見馴れた人は氣が  
付かんか知れないが、田舎へ歸りでもしたら、皆が吃驚しますよ。先日の  
夜上野町で貴下がお湯から歸つて茶の間へ入つた時には、僕だつて見違へ  
るやうだからな」香取は心の震へるやうにその時を思出して、「あの薄暗い

所へ貴女の白い艶のいゝ顔が見えた時は、僕は生返つたやうな気がしたんですよ」

「貴下もいろんな事を仰有るわね」と、女はわざと澄して、「幾ら煽てたつて奢りませんよ」と云つたが、目は心の中の悦しさを隠し切れなかつた。香取は次第に調子づいて、浮ついた口を利き出した。女も面白さうに聞いて、姿勢を崩して蓮葉な素振をもした。

やがて主婦をも座敷へ呼んで、一緒に晝飯を食べて、世間話に耽つた。が、主婦は見かけに依らぬ世辭のない口の重い女で、座輿を添へては呉れなかつた。時々は存在な言葉で人を輕んじたやうなことを云つた。「今時の女は學問したつて針一つ碌に持てないし、花を生ける術も知らんのだから困つたものだ。衣服の縞柄の見立てさへ出来ないから、變な身装をして歩いてる女が多い。流行だつて何だつて自分の身體を見てからのことだ」

と高慢らしく次の間にあつた反物を持つて來て見せながら、興もない説明をした。

「あんな事を云つて、反物を賣付けやうとするんですよ」と、お多代は主婦か茶の間へ引込んでから小聲で云つて、「町の呉服屋よりやこの家で買ふ方が安い事は餘程安いですの。貴下が若し衣服をお拵えなさるんなら、此處で買つておやんなさい。その方が餘程得ですよ」

「えー……」香取は氣の無い返事をした。そして短かい日の最早暮れかゝつてゐるのを見て、暇を告げて、立上つた。女は引留めもしなかつた。歸り際に手紙の事を念を押して戶外へ出て、大學前まで何も考へず脇目も觸らず、足早に歩いて來たが、ふと心が騒出した。何氣なく聞いてゐた主婦の話の端に疑ひの種が宿つてゐるやうな気がした。「この柄は仕立ると貴女にはよく似合ふんですよ。何時か著て被入やつた裕が一寸こんなのでし



たね。どうなすつてあれは？」と訊いてゐたが、それで見ると、以前からの知合ひであつたかも知れない。お多代に對する素振の他人行儀でなさ過ぎるのも不思議だ。

あんな家と懇意な筈はないのだがと、彼れはその家にもまた解けがたい秘密が潜んでゐるやうに思はれて、自分の家へ歸つてからも暫く想像を逞くしてゐた。

(十)

約束の手紙は翌日一日心待ちにしてゐたが、つひに來なかつた。で、責めるやうな語調で催促の手紙を出すと、やうやく簡単な返事が來たが、「何もかもお知らせする」と云つた言葉は忘れたやうに、只「たいくつして居り

ますから遊びにお出で下さり」と、卒氣なく書いてゐる。

あれ程堅く云つて置いたのにと、香取は腹立たしくなつて、「先方が困つて頼んで來るまで、此方から行つてやらない」と決心して、これまでの餘計な心盡しを愚しく思つた、宿受の印を捺したことをも悔いた。

「他人の傷つけた女を助けるために苦勞して、自分の僅の財産を減らしたりして、加之に知人から變に疑はれなどしては、此上もない馬鹿を見ねばならぬ。何もかも打明けて向ふから歎願するやうでなくては、好意の寄せ甲斐がない」と、冷かに自分のしたとを批評する氣分にもなつた。

そして二三日を過した。忘れるやうにと頻りに心を外の事に注がうとして、久しく跡絶えてゐた或友人を訪ねたり、「やまと」へも二晩續けて足を運んだ。先日は耳に留めなかつた女の名も分つて、少しは無駄口を利いて、長居をするやうにもなつた。女の顔は最初の時よりも次第に立勝つて見えた。

話してゐる中に、ふと、この女とても都を離れて淋しい田舎へ行つて見た  
くやつて、

「何處か連れて行つてやらうか、泊り掛けて」と、突如に云つた。

「え、連れて、下さい」と、女は半ば疑ひながら悦しうに云つた。

「何處にしよう」と、香取は考へたが、只の海岸や温泉へ行くよりも、世  
人の信仰してゐる寺か宮へかち詣りして見たい氣がして、「僕はまだ一度も  
行つたことがないんだが、成田へ行つて見ようか。お前は知つてゐるかい」

「いゝえ。私まだお詣りしたことないの。……だけど成田山は厭だわ」

「何故？」

「でも二人で彼處へお詣りすると、縁が切れるんですつて」

「まだ切れるも切れないもないぢやないか」と香取は笑つて、「しかし厭な  
ら外にしたつていゝ。鎌倉へても……」

「鎌倉？、だといゝわ。私大磯へも鎌倉へも行つたことないのよ。」

女は急に浮々して、一日も早く行きたさうにした。可成貴下に御迷惑を  
掛け様になると、祝儀や玉の勘定までし出した。

香取はその中電話で日取を知らせることにして、女の家名と電話番号  
とを書留つた。そして、もう三度目の馴染でありながら、矢張泊らうとは  
しないで、止められるのを振切つて、更けぬ間に其家を出た、北風が吹い  
て外は寒かつた。先日中の穩かな小春日が崩れて、俄に冬の近づいたのが  
薄着の肌に感ぜられた。

今年も程なく暮んとしてゐる。仕事もしなければ、楽しい思ひ一つしな  
かつた癡人のやうだつた一年が、間もなく過ぎんとしてゐる。彼れはせめ  
て新しい歳を迎へるといふことだけにても微かな望みを置いて、早くこの  
厄年のやうな一年の過ぎて、厭な記憶の消えてしまつたらばと思ひながら、

空家のやうに寂とした薄暗い自分の家へ歸つた。

歸ると、直ぐに机の上を見て、葉書の來てゐるのに氣付くと、若しやと心を動かしたが、それはお多代からではなくて、湯原からだつた。明日の午後訪問すると知らせて來たのだ。

前觸をして置くほどなら、只遊びに來るのではあるまい。何か用事があるだらうが、お多代の事で訊きに來るのではなからうか。若しさうだつたら、詰らぬ疑ひを受けぬやうしなければならぬ……と、彼れはその場合の辯解の言葉を豫め考へて、女のためにも自分のためにも都合のいゝやうに繕はうと企てた。

そして、湯原の話の様子で、直ぐお多代に會はねばならぬかも知れないと思つて、その夜女へ宛て、「……こんな譯だから明晩お訪ねする」と、手紙を送つた。

湯原の言葉次第で、却て女と自分との間の一層近くなりさうな氣もして、明日の午後を待受けるやうになつた。

て、夜が明けて正午となると、時計の針を見詰めながら、戸外の足音に耳を澄してゐたが、やがて下駄の音が家の前に留まつて、快活な湯原の聲がした。香取は稍極りの悪い思ひをして、縁側へ出て客を迎へた。

湯原は茶の間を覗いて、「相變らず達者で結構だね」などと、下女と近狀を話合つてから、緩く書齋へ入つて來た。不斷の通りの顔をしてゐる。

「閑靜でいゝね」と、障子を開けて庭の方を眺めたり、机の側に重ねてある書物を引出して見たりして、急に用事のありさうではなかつた。

でも何か言出すだらうと、香取は心に油斷しないで、やがて、遠廻しに妻君の様子など訊出した。

「この頃は兎に角落着いてよく働らいてるよ。時々例の癖で何か考へては

鬱ふさいでることもあるけれど」と、湯原は眞面目まじめになつて「お多代は君に迷惑めいわくを掛けたつてね。あれもどうか片付けるつもりだが……」

そして、相手のさう云つた心を計りかねて、香取が黙つてゐると、

「君も時々訪ねてやつて呉れたまへ。あゝして一人てゐると淋しくつて、碌ろくでもないことを考へんとも限らないから」と、湯原は眞顔まがほで云つた。「僕もあれについちや責任せきにんを以て相當の所置しよちは付けるつもりだが、兎に角極りの付いてしまふまでは、誰れにも内所ないしょにしときたいんだよ。自分でも成べく近づかんやうにしてるんだ。何しろ家内かないがあゝの風なのに、戸田の家でも親切せつてんごかしに突付きたがるんだから、甘く收まることまで傍から壞されて面倒めんどうがなかつた。自業自得じがふじとくと云へば云ふやうなもの、僕も實際困つたよ。しかし先づ圓く事が濟みさうだからいゝが、萬一の場合には君は僕の味方になつて大ひに助力して呉れたまへ」と云つて、調子を變へて、「あ

のことだけは僕の一生の失策だが、まあ大目に見て呉れるさ。一寸した迷ひだからねえ」と笑つた。

香取は聞いてゐる中に、皆が連類になつて自分を欺いてゐるとのみ思はれて、身體中の血が頭に上るやうだつた。が、じつと心を鎮めて、相手の顔を見ないやうに俯目になつてゐた。

そして無意識に返事をしながら、次第に目の前の事を忘られて、追分の家の中がさまざまに想像され出した。

「どうだ、先日のあの洋食屋へでも行つて見ようか」と、湯原は暫くして云つた。

「えい……しかし僕はこれから神田の方へ出掛けなくちやならんのです、三時頃から」

「ぢや、もう時刻だね」と、湯原は時計を見て、「其處まで一緒に行かう」

と直ぐに立上つた。

香取は否みかねて、厭な思ひをしながら、連れ立つて外へ出た。が、湯原は途々「今日は遅くまで君の家で遊んでたことにしといて呉れたまへ」と頼んだ。

そして、別れて電車に乗つて香取は神田まで来たが、何處と云ふ目的はなかつた。で、市街の角に突立つて、夢のやうに周囲の動搖を見てゐたが、やがて、立つてゐるのが堪へられなくなつて、手近い牛乳屋へ入つて、倒れるやうに椅子に腰掛けた。

「湯原は本郷行に乗つたのだから、今追分に行つてゐるかも知れない」と氣付くと、二人の姿が醜い様をして目にちらつき、その顔は自分を嘲つてゐるやうに見えた。心に力を入れて排退けやうとすればするほど、色んな不様の姿勢をした二人が一層色濃く浮んで、外の人間の顔は影が薄くなつた。

「お乳を召上るんですか」と、側で催促する主婦の聲に驚いて顔を上げて、

「あゝ」と、香取は慵さうに返事をした。

そして、再び同じ事を繰返して考へてゐると、根が盡きて、見る／＼壽命が縮まりさうだつた。「明日の朝行つて見る。それからの事だ」と、心を宥めたが、すると又會つてどう云つたらいかと果しなく案ぜられ出した。で此處にじつとしてもゐられなくて、一息に牛乳を呑んで、直ぐ外へ出た。氣を散らす様に周囲を見ながら歩いたが、目に觸れる人間の顔は皆佻しい色をしてゐた。

ふと彼れの顔が店先の鏡に映つて消えたが、それが獲れて死相を帯びてゐるやうに見えたので、彼れは身震ひして、逃るやうに急いで歩いた。知らず／＼神樂坂まで来たので、「やまと」へても寄つて休んだら、幾らか氣が晴れるかと思つたが、興もない遠出の話など、浮いた事を聞いてゐ

られさうではないので、側まで行つて引返した。

また當もなくブラ／＼歩いてゐたが、ともすると、先にさつと見た自分の顔が見すばらしく痛ましく思出されてならなかつた。で、ふと目に付いた洋酒屋へ入つて、舶來の葡萄酒を買つて家へ歸つた。そして、コップへ一杯呷つて、酔ひの出るのに力を得た。朽ちた唇を臙脂で色取つて欺くやうに、自分の木地を酒で染めて隠してゐるのだと知りながら、紅く勢ひ付いて來る顔を見てゐると幾らか慰められた

やがて怠くなり眠氣さして來たので、彼れは晚餐も食へないで、毛布を被つて假寝をした。不思議にも不斷にない熟睡に陥つて、下女に注意されて寢床へ入つたのも夢中だつた。薄ら寒くなつて目の醒めた時は、最早眞夜中を過ぎてゐる。下女の安らかな寢息と枕時計の音とが、忌はしい鼠の騒ぎの間に懐しく聞えた。

次第に晝間からの事を彼れの靜まつた心に浮べて見ると、自分で自分の心根が淺間くもあり、愚しくも思はれた。ち多代と自分との間には何の關係もないのではないか。手頼のない可愛相な身の上だと思へばこそ、助けやる氣にもなつたのだが、湯原の方で引續いて世話をしてゐるのなら、自分は構ひ付けなくても安心してゐられるではないか。どうせ初めから縁のなかつた女のために、大切に庇つてゐる自分の心に傷を付けては取返しのかかぬ事になるのだつたのに……

で、彼れはそれさうして濟ませて、朝になつても訪ねて行かぬことに極めたが、その代りに最後の手紙を送ることにして、ランプを點けて机に向つた。

「……最早一生の目に掛らず候。貴女の將來は如何に成行くか知れぬど、以後如何なる場合にもち手紙をお送りなきやう願上げ候。上野町の方へ

は當分近寄らず候へど、萬一貴女の事から悶着を惹起したる際にも、小生は少しも責任を負申さず候。宿の保證もなるべく取り消し下されたしと、一氣に書き下した。

そして、再び寢床へ入つて、温かい日が枕許に差込むまで起きなかつた。起きたつて世の中に用事もなければ、樂みもなかつたのである。

「思切つて今日にもあの女と旅をして見ようか」と、暫くして起きて、落葉の亂れた庭を見ながら、ふとその氣になつた。

て、あの手紙を自分でポストへ入れに行つた次手に、自動電話へ寄つて、辰村家へ電話を掛けた。柔しい聲が聞えた。

「小菊と云ふ女はゐますか」

「私、小菊ですよ。貴下何方？」

「僕は香取。先日約束した所へ今日行かうと思ふんだが」

「今日ですつて」と、驚いたやうな聲をして、「あまり急ぢやありませんか。」

「都合が悪いんから」

「さうねえ」と云つて、電話口を離れて家の者と何か話してゐた。

「ぢや、二三日後にしよう……」

「明後日だといふんですがね、勝手ですけど」

「ぢや、さうしよう」

香取は相手がまだ何か云はうとしてゐるのを耳に留めずに、直に電話を切つた。

折角氣乗りのした鼻先を折られて、詰らない氣がして其處を出た。いつそ一人で旅に出やうかとも思つたが、田舎の宿で悄然して時を過しかねる自分の姿が、今から目に見るやうなので躊躇された。

彼れは廣い都の何處にも、自分の身を落着ける所がなかつた。そして、只歩いてゐると、一度排退けた雲がまた湧立つて心を鎖したが、すると、昨日まで念頭に置かなかつた湯原の妻君が、不思議に懐しく思はれ出した。何も知らないのだらうかと氣の毒にもなつて、つい訪ねて見なくなつた。で、湯島の梅月へ寄つて栗饅頭を買つて、それを手土産に持つて行つた。妻君は襷掛けて拭掃除をしてゐた。よく見ると、先日よりもまた元氣のいゝ顔をしてゐる。磨立てた頬には艶が出てゐる。

「お一人だとも忙しいでせう」と、香取がお世辭を云ふと、

「でも忙しい方が私達にはいゝんですよ」と快く答へて、「どうせ働くより

外に能がないんですからね。本當に因果な性分だ。一日だつて氣樂に遊ぶ氣にやれないんですよ」

「その方が結局仕合せかも知れない。遊ばうたつて、さう面白いことはないんですからね」

香取は妻君が淺黒い手足を動して、座敷の隅々まで丹念に掃除するのを、邪魔にならぬやうにして暫く見てゐた。大略片付いてから、妻君は襷を取つて一息吐いてから、ふと思出したやうに、

「昨日は湯原がお訪ねしましたつてね、大變御馳走になつたと云つてましたよ」と、笑顔をして云つた。

「え」と、香取はドギマギしながら、「湯原君は何時頃に歸りましたか？」  
「随分遅かつたんですよ。歸つて來て煙草吸つてる中に十二時が打つたんですよ」



「どうですか」

「お宅を出た時がもう餘程遅かつたんでせう」

「えー」

それきりて話は外へ移つたが、香取の頭には昨日の三時から十二時までの事が渦を捲いた。妻君の仕掛ける世間話など耳に入らなかつた。

「この頃湯原君は毎晩家にゐるんですか」と、やがて何氣ない風で訊いた。

「えー、用事のない時は大抵家でごろ／＼してますよ。遊びに出るつたつてお金がないんですもの。昨夕は貴下に御馳走になつて、お酒の香ひをさせてましたけど、この頃滅多に他所で飲んで來ることはありませんの」妻君は安らかな目付をしてゐる。

「家にゐてどんな話をしてるんです？ 毎日二人きりて、話があるんですかね。僕なんか下女と二人でゐて、何か話したくつても種がありませんがね」

「そりや召使ひと夫婦とは違ひますよ。……でも先日雨の降つた晩、湯原が何か一人で考込んで、気が鬱いて仕方がないつて、一緒に鈴本へ落語を聞きに行つたんですよ。私一年目に寄席へ入つたのですの」

「ぢや、この頃は此家も平穩無事なんですわ」と、香取は何時かの晩の妻君の狂人染みた様子を思出しながら、皮肉らしく笑つた。

それが不快に聞えたのか、妻君は今まで機嫌のよかつた顔を曇らせて、

「何故です？」と詰つた。

「いえ、何でもありません。湯原君が家に落着いてさへゐればいいんだが……」と言濁しながら、香取は我知らず多代の事を打明けたさうになつたが、強ひて心を壓へて、「寄席は面白かつたんですか」と訊きたくもな

ことを訊いた。

「私落語は義太夫ほどに好かないんですけどね、それでも随分笑はされま

したの。圓藏まんざうてあの馬うまのやうな長い顔かほした男おとこがあるでせう。あの男おとこはよく喋あは舌したんですねえ。私わたしよくあんなに口くちが動うごくかと思おもつて呆あきれましたよ。それがこんな話はなしなんですの」

妻君さいくんは機嫌きげんを直ただして、さも珍めづしさうに「轉宅てんたく」といふ落語はなしの筋すぢを語りながら獨ひたり笑わらつた。香取かとりは聞いてゐるのが次第しだいに慵もつくなつて、つい受答うけこたへをすゝるのを忘わすれて外見そとみをしながら、外ほかの事ことを考かんがへてゐたが、話はなしが終おると

「神戸かたてからは音信おとこりがありましたか」と、出拔だしぬけに訊きいた。

「無事ぶじに着ついたつて知らせて寄越よこしたさうですよ」

「さうですか」

「あんな女おんなは東京とうきやうなんかへ來こない方がいゝですよ。悪い風ふうを見習みならふと碌ろくな者ものになりやしない。私些わたしちつとも知らなかつたんですけど、田舎ゐなかでも皆みんなに瓜彈つまぼこきされてたんですつてね。随分男狂ずぶんおこもしてたらしいんですの」

妻君さいくんは氣きの置おけぬ話相手はなしあひてを得たたのを喜よろこんで、手厚てあつく待遇たいぐして緩ゆるくり遊あそばせやうとしてゐたが、香取かとりは妻君さいくんの顔かほを見てゐると、次第しだいに氣きの毒どくなよりも愚鈍おろかに見みえ出した。これで湯原ゆはらの家いへも無事ぶじに治なまつて行くのかと思おもふと、不思議ふしぎでならなかつた。そして、話はなしをしてゐるのも齒搔はがゆくなつて、急用きふようでも控ひかへてゐるらしく言譯いひわけして、問まもなく其處そこを出でた。

豫期よきに反はんして妻君さいくんが些ちつしも勘付かんついてゐないのが、却かへつて物足ものたらなかつたので、若わかしも誰たれかゝ秘密ひみつを發あはして教おしへてやつたらこんな結果けつこになるだらうと、その後の騒さわぎを想像さうぞうしながら歩いてゐたか、途々みちも多代たよらしい女おんなが頻しきりに目めに付ついた。胸騒むねさわぎして見詰みづめると、どれも皆みななあの女おんなよりは醜みにくかつた。目め許もとにか口くちのあたりにか、何處どこかにあれほどの懐なつかしさがなかつた。すると多代たよを見た男おとこは皆忘みなわすれがたい愛着あいぞくの思おもひを寄よせてゐるやうに思おもはれた。二人ふたり連立れんたつつた湯歸ゆかへりの藝者げいしやにも出會であつたが、その歩振あしふりが妙めづかに卑いやらしく見み

えたり、水々した顔立が浮ついた淺墓な女のやうに思はれたりした。て、彼れは訪ねて行かうと決心もしないのに、風に逆らつて追分の方へ足を向けた。そして只その方へ歩いてゐると云ふことだけでも、心に張合ひがあつた。

門の前に來ると、耳を澄ましながら、二三度行戻りした。矢張物音がしない。門に觸つて見ると、針金が掛つてゐた。で、怖い者に觸るやうにして、そつと叩くと、内から大儀さうな返事をして、女が門を開けに來た。香取は相手がどんな顔して迎へるか、平氣を装つて見入つてゐたが、其處へ現はれた女の顔は、例に似氣なく陰險に見えた。女は淋しい微笑を浮べて挨拶して、「今日は屹度入らつしやるだらうと思つてたんですよ」と云ひながら、急いで座敷へ駆込んだ。座敷にはまた枕や掛蒲團が出してあつた。手早くそれを片附けてから、

箱火鉢を真中へ持出して、「今日も私留守番なの。主婦はまた朝から遊びに出てゐるんですよ」と、呆れたやうに云ふ。

香取は昨夕其處にゐたらしい湯原の姿を目先にチラつかせながら、暫く考へ込んでゐたが、「どうなすつて?」と、女に訊かれたので我に返つて、

「今朝僕の出した手紙はまだ著かないんですか」と、目を据ゑて問詰めた。

「いゝえ。昨日此家へ入つしやると云ふ手紙を頂いたさりですわ。……」

「……今朝のお手紙つて、どんなこと?」

「今に著いたら分るてせう」と、香取は意味ありげに云つた。

「どんなこと?。何か大事な手紙?」と女は氣遣はしげに訊きながら、用心深い目で男の様子に注意してゐたが、やがて俄かに首垂れて可憐らしい目付をして、「私今日こそ何もかもお話しますわ。黙つてちや貴下を騙してたやうだから」と、聲を震はせた。

香取は容易ならぬ恐ろしい言葉がその口から出さうに思はれて、今直ぐ聞かない方がいゝやうにも思はれた。

「私、脅迫されてるんですの、昨夕も脅迫されたんですわ」

「何と云つて？……だけど、昨日會つた時だつて、脅迫なんかする人間とは見えなかつたが……あの人はそんな人ぢやないんだが……」香取は湯原と云ふ名を口にするのさへ不快なので、それを避けるやうにした。

「それは貴下がよく御存じないからですよ。初めからそんな人なんてですよ」「で、どう脅迫するんです。何時までも關係を絶たんと云ふんですか」

「え」と、女は曖昧に答へてから、稍心を落著けて「私ね。どうされたつて開はないから、姿を隠さうと思つてるんですけど……思案に餘つてることがありますの」

「……………」

「私、もう只の身體ぢやないんですの」

女は案外平氣で云つたが、香取は目に見える者が皆、女も自分も一緒に、地の底へ沈んで行くやうな氣がした、頭がクラクラした。

「ぢや、妊娠してるんですか」と思はず云つて、自分で自分の聲を疑つた。

で、二人は暫く口を噤んでゐた。木枯しが庭に吹付けて、サラ／＼と落葉の轉がる音がした。火鉢の粉炭は火花を散らしてゐる。

「昨夕もそりや慌ろしいことを勧めますの……薬を飲めつて云ふんてすけど……私どうしてもあの人の云ふことなんか聞かないつもりですわ」

やがて女はきれ／＼に云つた。そして目に涙を浮べてゐたが、言難いことを打明けたので、心が稍軽くなつたらしく、「私誰れにも知らせないで、一人で屈託して居たんですから、貴下悪く思はないで下さい。自業自得と思はないで下さい。そりや私が悪いんですけど、皆なに憎まれてばかりゐる」

て、味方つて一人もないんですから……貴下にまで憎まれちや、私立瀬がない」

香取は女が手を合せて自分一人に助けを乞うてゐるやうにのみ思はれて、一時疑ひも憎みも消えて、只手に手を執つて思ふ様泣いてやりたくなつた。外の世間は次第に心から遠ざかつて、只二人が苦い夢を見てゐるやうだつた。口に出して互ひの思ひを語らなくとも、唇は觸れなくても、心と心とは最早融合つてゐるやうに香取には感ぜられた。

「で、これからどうするんです？」

「どうするつたつて、外に行く所がありませんから、當分此家にゐやうと思ひますわ。身體さへ軽くなれば、またどうにでもなるんですから」

「だけど、貴女の身體はどうしたつて元のやうにはならんのだ」

「それはどう！。どうせもう誰れも相手にしては呉れないでせうから私

一生一人ぼつちで暮すつもりですの」

「だけど、女が一人ぼつちで東京で暮せるものですか」

香取は女の幽かな希望をも無體に押潰しくして、最早何處にも助かる道のないものゝやうにのみ思込んだ。たとへ男に傷つけられたにしても、相手が湯原でさへなかつたらばと、無慈悲な悪運をも悲んで、「事情が分つたら僕も是家へ遊びに来る譯に行かない」と、萎れて云つた。

「こんなお話しだから、もう来て下さらないんですわね。愛想の盡きた女だと思つてゐらつしやるんでせう。」

ちや、これでお別れだからと女は氣を引くやうに云つて、せめて今日一日緩り遊んで行つて呉れと頼んだ。香取も立兼ねて、膝を崩して坐つたり、肱枕で寐ころんだりして時を過した。何時の間にか話は急所を外れて、田舎の思出や此家の夫婦の噂などに移つて、香取の心は次第に鎮まつた。最

早底の底まで知合た間のやうで、何でも無い話にも深沈な味が添つた。

と、其處へ郵便の聲がした。女は受取つて来て、「貴下からのですよ」と封筒を見てゐると、香取は慌て起上つて、咄嗟に手紙を奪取つて、寸々に引裂きかけた。女は突立つたまゝ呆氣に取られてゐたが、「何故そんなことなされるの。屹度酷いことが書いてあるんだわ」と、やがて恨めしさうに云つて、手紙の反古を奪はうとした。

香取は取られまいとして争つて、終ひにその紙片を火の中に投込んだ。女は煙に咽びながら、肩で息をした。

「何も變つたことは書いてやしないんだけど、僕の面前で僕の手紙を読まれるのは厭だから」と、香取は快く笑つて、障子を開けて煙を出した。

「貴下は無法な人ね」と云つて、女は飛散つた灰を箒で掃出しながら、「私

貴下に差上げたいと思つて、手紙を書いてるんですよ。だけど貴下が御自分の破つちやつたつから、私も破つちまいますわ」と、口元に笑ひを浮べた。

「今其處にあるんですか」と、香取は目を張つて飛付くやうに云つて、「先日詳しいことを書いて送ると云ふ約束だつたんだから、それは僕に見せる義務があるわ」

「だけと見せませんよ」と、女は翻弄ふやうに云つて、「私の目の前で私の手紙を読まれるのは厭ですもの」

「ぢや、家へ歸つてから讀んだらいゝてせう……本當に書いてるんですか」

「あら、嘘だと思つて入つしやるの」と云つて、女は針箱から手紙を取出して、上書を見せながら、「お歸りになる時お渡しませうね。私二日もか

「つて一生懸命に書いたんだから、私の記念と思つて大事にして下さると云つて、袂へ隠した。」

「記念が手紙ぐらゐぢや、あまりち粗末だな」

「だつて私何にも持つてゐないんですもの……もうお正月が来るんだけど」

香取は今更のやうに部屋を見廻したが、女の所有物で金目のありさうな者は一つもなかつた。先日と同じ洗曝しの瓦斯織か何かを著て、白い指に嵌めた指輪も見窄らしかつた。で、見てゐる中に、一時の浮付いた心が沈んで、

「僕もこれまでに二三人の女を思つてたことがあつたんだが、何時も何か知らん障礙が出来ては頭を痛めるばかりだつた。氣持のいゝ思ひをして遊んだことなんか、一度だつてありやしない。僕が親しくする者は、皆な悲

慘なやうな氣がする」と、ふと、獨言のやうに云つて、「貴女はさう思ひませんか」と、感じを籠めて相手を見詰めた。

が、女はその言葉の意味を判じかねて「え」と軽く答へて、「世の中の事は障礙の多いものですわね」

「實際さうだ。殊に僕は誰れに突合つても、直に何か知らん障礙が出来て来る」と、香取は獨て考へ込んだが、すると、知つてゐる人々は皆毒氣を含んでゐるやうにのみ思はれ出した。

「あんまり脅迫するやうだつたら、仕方がない。貴女も身を隠したらいいせう。あんな人の世話にならなくつたつて、身の極りはつきさうなものだか……矢張一人ぢや處分が出来ないんですか」と、やがて問詰めると、女は横を向いて、怠さうに身體を崩して溜息吐いた。

で、再び問詰めたが、女は耳を蔽はぬばかりにして、「もうそのお話は止

して下さい」と、怖さうに押し止めた。

香取は口を噤んで、半ば身を伏せた女が、さも遣場のないやうにその片手を彼れの膝に乗せるのを、じつと見てゐた。

が、彼れはやがて身震ひして立上つた。女の手の温味が膝に傳はると急に怖氣づいて、逃げるやうに暇を告げた。女は何氣ない様子で門の側まで見送つて来て、別れ際にふと思出したやうに、袂の手紙を取出して、男の手に握らせた。

やがて釣金を掛けて女の家へ入つて行く足音を聞いてから、香取は一度振返つて暫く門の方を見詰めた。そして、手紙を披きながら、表通りへ出た。假名の多い分り難い手紙を當推量で讀んで見ると、今打明けて話したやうなことを微見かせてゐるばかりで、豫期したほどの異つたことも書いてなかつた。が只、「毎日心細くなつた時には、貴下のお顔を思出して居りま

す。そして、私が若しも氣儘な身であつたならと情なく思ひます」といふ終ひの方の覺束ない文字が、彼れの目を惹付けた。

茫然してゐた者が確められたやうで、こんな文字をも喜んで、彼れは手紙を袂に入れて、家へ歸る氣もなく電車の方へ歩いてゐたが、次第に以前と同じ減入つた氣持になり出した。

「いつそ湯原の考通りにして片をつけたら。薬を飲むかどうかしたたら」と、ふとその一點にのみ思ひを籠めた。女の身の危険や、湯原との關係は暫く忘れられて、新に憎らしい邪魔物が其處に現はれてゐるやうな氣がして、たとへ脅迫しやうとも、湯原の手でその邪魔物を取除ける工夫をさせなかつた。

て、電車に乗つてからも、その工夫や結果を思込んで、家へ歸つたが、机の上には男名前で小菊からの手紙が来てゐた。堅苦しい男文字で、今朝の



失禮を詫びて、今夜にもお出て下さい、お約束の件でも話しをしたいと、明  
晰に書いてある。代筆である上に前後に極り文句の添へてあるのが、彼れ  
は厭だつたので、手紙に引寄せられる氣はしなかつた。

そして、その手紙とお多代のとを大事さうに机の引出に仕舞つて、當分  
は何方へも顔出すまいと決心した。湯原が始末を付けるまで追分へも近寄  
らぬことにした、子供の處分がどう極るかど氣遣ひながら、どちらにして  
もその経過を見るに堪へられなかつた。

で、彼れは以前のやうに、強ひて書物を讀んだり、冬枯の郊外を散歩し  
たりして、二三日淋い日を送つたか、ともすれば胎兒の姿がさまざまに無  
残に想像されてならなかつた。夜中の夢には母親に抱かれた可愛らしい子  
供が見えたり、手足の撈取られた化物のやうな子供が見えたりした。  
或朝も目を醒まして、晴やかな日影を見ながら、若い身空で一刻の平和

も得られない自分を憐んだ。寒い風にも當てぬやうに、自分の心を庇つて  
來た一年の休養も何の甲斐も無つたとを情なく思つた

「鎌倉へでも行つて見ようかな」と、彼れは氣が進まぬながら、強ひて思立  
つて、自動電話へ行つた。そして、小菊と打合せをして、正午時分に用意  
をして「やまと」へ出掛けた。

(十一)

「今小菊さんから電話で知らせて來ましたよ。今日入つしやるんですつて  
ね」と、其處の女中は顔を見ると云つた。

「さあ。行かなくちやなるまいね」と、香取は詰らなさうに答へて、「あ  
の女は運がいゝね、僕にでも出くわさなかつたら、遠方へ連れて、呉れる

者なんかありますまい。僕だつて何も彼女と行きたいつて譯ぢやないんだが」

「さうねえ」と、女中は眞面目に同意したが、「でも、あの女ならお連れなすつてさう耻かしくはありませんよ。衣服だつて一通り持つてるんでせう」

「衣服なんか粗末な方が却つていいよ。僕がこんなんだから」

香取は自分の服装の書生らしくて、藝者を連れて旅に出る人とは見えぬのに初めて氣付いた。そして、外に収入もなければ手頼るべき人もない身で、こんな事に無駄遣ひをするのが愚しく思はれ出した。戀しいお多代に指環一つ帯一筋買つてやらないで、何の興もない女と贅澤な旅行をする自分の心根が分らなかつた。

が、このまゝ止す氣にもなれなかつた。小菊の方では、客が待遠しがつてゐるだらうと思つたのか、二度も電話を掛けて遅刻の申譯をした。香取は

急立てもしないで、一時間あまり寝たり起たりして待つてゐた。

と、やがて女中と話をしながら、小菊は階子段を上つて来て、次の室に姿を見せた。黒い眼鏡を掛けた白い顔と、縮緬の羽織と、丸鬘とが、香取の目にも派手に映つた。女は極りの悪さうに躊躇してゐたが、「さあ奥様をお連れ申しましたよ」と、笑つてゐる女中に引立てられて入つて来た。手にはラペラバックを提てゐた。

「何が入つてるんだい、その中に」

「何も入つてやしないわ。だけど、空手だと變ですから」と云つて、女は

坐つて、長襦袢の仕立上るのを待つてゐた。めに遅くなつたと申譯をした。

香取は時間を量つて、女だけ俵で停車場へ向はせて、自分は後から電車で行くことにした。そして、女が家の者の賑かな聲に見送られて出て行く後姿を、二階の窓から見下してから、階下へ下りて、

「彼女まだ服装が揃はないね。衣服はいすが、コートさへ着てゐないし、手袋も揃めてゐないやうだね」と笑つた。

「でも丸鬚がよく似合いますわね。女振がよくなつて、見違へるやうだ」と云つて、女中と主婦と小娘とが、左右からお土産をドツサリと頼んだ。「お土産よりも、僕は何處へ行くか、何時歸るか分らないよ。二人で驅落しようかね」と、戯談らしくなく云つて、香取は其處を出た。道を急がうとはしなかつた。

久振りに停車場へ来たので、珍しさうに騒々しい場内を見上げると、端近く出て待つてゐた小菊の姿が直ぐ目に付た。

「鎌倉行は今直ぐ出るんですつて」女は側へ来て急立てるやうに云つた。「何。遅れたらこの次でもないさ」香取は緩くりして切符を買ひに行つた。汽車は横須賀直行で、軍人が四五人乗つてゐた。香取は絶えず窓の外を

眺めて、女に向つてはあまり口を利かなかつた。女も大人しくしてゐて、時々小聲で途中の地名を訊くぐらゐだつた。

鎌倉に着くと、最早燈火が點いてゐた。香取は淋い所をと撰んで、材木座の清光館へと車夫に命じた。學生時代に試験後の休養のために四五日其處に泊つて、屢々近所を散歩したのだが、それが今記憶から薄らいて、道の左右が明かに思ひ出せなかつた。二つの俵は只淋い暗がりを出りくねつて、波の音のする方へ馳せた。

宿屋の玄關へ着くと、二階の海近い部屋へ案内された。障子を開けると、沖の方に斑に浮いた漁火が見渡された。

「淋い所だわね、私途中が怖かつたわ。」女は珍しさうに周囲を眺めてから、部屋の中に落着いて、「こんな静かな所に一人てゐたらどんなでせう」と、深く感じてゐるやうに云つた。

「さあ」香取は氣のない返事をした。そして一人て遠い土地へ來てゐるやうな氣持になつてゐた。

「私今は貴下一人が手頼りよ」と、女は斜に男を見上げた。

「ぢや、僕が今夜中にゐなくなつたらどうする？」

「ゐなくなるつたつて、私一緒に隨いて行くから、何處へても」

「海の中へてもかい」

「え、海へても山へても行つてよ」

さう云つて微笑してゐる女の顔を、香取はじつと見詰めながら、人里離れた淋しい土地へ女一人連れて來れば、あらゆる媚を男に捧げるものゝやうに思つて、若しもお多代を誘出したのだつたらと空想し出した。

女中の持つて來た襦袢を着て一緒に湯殿へ下りて、温い鹽湯に浸つてゐると、その空想は一層激しくなつた。湯氣に包まれてゐる女には、少しも

男を憚る風は見えなかつた。

部屋へ歸つて、女の化粧の濟むのを待つて夕餐の膳に向つた。土地の者らしい女中が鹿爪らしく、女の間に答へながら給仕をしてゐたが、香取は一人黙つて空腹に舌鼓打つて皿から皿を涉つた。

やがて膳が下げられると、女は火鉢に寄つて、巻煙草に火を點けて男に渡した。

「あの女中は随分色が黒いわね。お湯から歸りに見てたら、一人も綺麗な女中はゐないのよ」と、侮蔑むやうに云つた。

「初め此處へ案内した女は一寸可愛らしいぢやないか。馬鹿にいゝ目をしてゐる」香取は心に留めてゐないのに、むむとどう云つた。

「貴下あんな顔がお好きなの。私あの女の顔は曲つてるやうに思つてよ。」その言ひ方があまりに眞面目なので、香取は思はず吹出した。

「さうぢやないか知ら」と、女は考へて

「こんな田舎で女中なんかして、將來はどうするんでせう？」

「女中だつて、それ／＼先の當てはあるだらうよ。他人のことよりもお前は どうするんだい」

「私？ 私ぢやんと考へてるわ。何時までも藝者なんかしてゐないの」と、女は直ぐに勢よく云つて、問返されるのを待つてゐたが、香取が只「さうかね」と冷淡に答へて、進んで訊かうともしないのに拍子抜けがして、「私來年一杯で堅氣になるのよ」と、獨言のやうに呟いた。

其處へ番頭が宿帳を持つて來たので、香取は身體を起して、出鱈目に姓名を書留めて、次手に繪葉書を取寄せた。そして、何處へ送らうかと迷つてゐると、女は氣に入つたのを四五枚撰んで、袖屏風をして、コン／＼何か書出した。

「何處へ出すんだい、お見せよ」と、香取が手を伸すと、女は筆を持つたまゝ遠くへ逃げて行つて、

「私出したい所がどつさりあるのよ。お母さんの家へも、神田の姉さんの家へも……私一度も繪葉書を出したことはないんだから、こんな折に方々へ出したいわ」と云つて、暫く覺束ない筆を動かしてゐたが、書終つて大息吐いて、「貴下幾枚書いて？」

「僕は出したい所がないよ」香取は書きかけた一枚を引裂いてゐた。

女は残つた繪葉書を見比べながら土地の實景を訊いて、明日を樂んでゐたが、ふと思出して、家へ電話を掛けたいと云つて、男の許しを得て階下へ下りて行つた。

香取は一人になると廊下へ出て、關の中を透かして、心當てに長谷や江の島の方を見てゐた。すると、向ひの部屋から若い男と女とが手拭を持つ

て出て来て、静かに廊下を傳つて階下へ下りて行つたが、他人に見られて  
面羞さうに顔を背けた女の素振で、それが新婚の夫婦ではないかと思はれ  
た。

島田に結つた初々しい顔立は、見えなくなつてからも、暫く彼の胸に懐  
しい影を留めた。人間の幸福はあの二人の中に宿つてゐるやうに思はれた。  
そして、闇の中に見付けた燈火のやうに、結婚と云ふ事が彼れの心に燦い  
た。あゝして夫婦の契りを結んで、都を離れて二人のみで旅をしてゐたら  
と羨ましかつた。

が、妻として目差す女は彼れにはなかつた。知つた女の顔を思出してゐ  
ると、お多代の顔のみが意地悪く目の前に迫つて来て、それを搔消すだけ  
の魅力を持つてゐる顔は何處にもなかつた。

と、其處へ階子段に足音がして、小菊が微笑して現はれた。側へ來ると、

「便利なものだわね、こんな遠方から話が出来て」と云つて、男を連れて  
部屋へ入つて、「私、皆なを羨ませてよ。清子さんも松香さんも家にゐたか  
ら、交りぐお話して來たのよ」

「ぢや、お前の素性がこの家へ分つてしまつたね。」と香取は笑つて、「新婚  
旅行のつもりだつたのに、化の皮が現はれたね」

「どうせ仕方がないわね。だけど私氣をつけて話してたのよ」

「今時分家に愚圖々々してゐるやうだと、お前の朋輩は皆な賣れないんだね」

「さうでもないわ」と打消して、女は五六人の名を云つて、それぐの稼  
高や借金を数上げた。

それを聞いてゐると、つまり小菊自身が一番の流行妓らしいので、香取  
は、心では信じぬながら、「藝者つてそんなに稼げるものかね。ぢや何時ま  
でもやつてたらいぢやないか」と煽てるやうに云つた。

「でも、私なんか生れ付がこんな稼業に向かないんですよ」と、女は眞面目に答へて、「私これ陰氣な性分ですからね。姉さんによくさう云はれるのよ。小菊さんは鬱いていていけないつて」

「さうかね、お前ぐらゐだと、藝者として鬱いてゐる方かね。何か心配があるんかい」

「別に心配つてないわ。どうせ藝者してれば、それは厭な思ひすることは幾度もあつてよ。だけど初めから私覺悟してゐるから、さう苦にはしないのよ。それに姉さんには大事にして貰えるし……只ね」と、云掛けて、女は火鉢に擦寄つた。そして、巻煙草に火を點けて、唇を尖らせて不器用に吹かせながら、無邪氣な口調で、「私副食物に好嫌ひがあつて仕様がないの。だけど外の人が食べてるのに私だけ食べない譯に行かないでせう。私我慢して食べてますけど、嫌ひな者を出された時は、本當に情なくなつてよ。」

「それだけが今の苦勞なんかい」見た所二十歳にもなつてゐるさうな女が、それ位のことを苦勞らしく云ふのを、香取は不思議に思ひながら「ぢや、早く誰れかに落籍されたらいゝぢやないか。そんなお客様は一人もないんかい」

「だつて、厭な人と一緒にゐたかないわ。厭な人と一緒にゐるよりや、藝者してる方が勝しよ……だから私から思つてるの。借金さへどうかなたら、老婢を使つて小さい家を持つて、彼家の看板だけ借りて勤めようと思つてるの。さうすれば自分の好きな者が食べられるから」

「それは何時のことだい。さうなつたら僕も時々遊びに行くんだがね」

「え、入つしやい。御馳走しますから……私來年中にはさうなりたいわ」

「僕も來年はもつといゝ月日を送りたいね」香取は自分の心に向つてさう云つたが、ふと打解けた氣持になつて、「お前は今惚れた男があるのかい。」

人や二人はあるだらう。いろんな男に會つてゐるんだから」と、今までになく力を籠めて訊いた。

「そんなこと訊いてどうなさるの。私惚れたことも惚れられたともないのよ。可愛相でせう」

「だつて僕が惚れてるぢやないか、惚れてゐなくちやこんな所まで連れて來りやしないよ」と、香取は眞顔で云つて、「お前はさう思つてゐないのか」

「まさか……」と女は笑ひながら、何と答へようかと逡巡つてゐたが、やがて品をつくつて、「こんな稼業をしてゐる間は惚れたつて詰らないわね。どうせ藝者だからつて、私達の云ふことは眞に受けて貰えないから」

「さうでもないさう」  
「それに私、思つたことも口に出せない性分なの」

「ぢや、僕に惚れてゐる口に出しちや云へんのだね」

「え、さうなの」と、女は戲談らしく言紛らせた。そして、男の様子の眞面目なのに當惑して、悦しがらせた艶をつけやうとしたが、相應しい言葉も見つからなかつた。で、「今朝家の姉さんがね、小菊さんはい、お客様が出來て運がいゝつて、今朝さう云つて、よ」と、わざと重々しく云つた。

「僕でもない、お客様かね」と、香取は樂つたいやうな氣がして、この先女の爲になる氣遣ひはないと、木地を剝出してしまひたくなつたが、折角からして二人連立つて來て居りながら、互の興を醒ますのも愚なことだと思返した。そして、女の小さい自負心を傷つけるやうなことを口に出すよりは、嘘にでも親切な口を利くやうにと心を決めて、「僕もお前が自由の身だつたら世話をして遣んだがな。まさか借金を拂つてもやれないけど」と、眞實らしく云つた。



「見て入つしやい、今に自分で氣儘な身體になりますから……さうしたら私貴下のお家へ行つてよ。行つてもよくつて」と、女も眞實らしく云つた。

「あゝ」

「東京へ歸つたら、一度貴下のお家へ行つて見たいわ。いゝてせう」

「下檢分にかい。そして家が汚かつたら考直さうと云ふんだらう」

「あら、家なんかどうだつていゝわ。私いゝ家にゐたいともいゝ衣服を着たいとも思はないわ。只氣樂に暮せればいゝと思つてよ」

「若い癖に悟つてるんだね。ちや春着の心配もないだらう」

「えゝ」と女は同意しかけたが、ふと心に雲が掛つて「でも藝者してる間は、身装を構はない譯に行かないわ。無理にてもいゝ服装してる方がつまりは得よ」

「あの土地ぢや、お前なんかいゝ服装をしてる方ぢやないか」

「さう！だから何處の宴會へ出てもね。さう耻かしい思ひしたことなくつてよ。……だけど、私今年中には是非拵えたい者があつてよ。お召のコートとね——セルは持つてるけどあれは厭だわ——それに小ぢやい金時計を買ひたいわ。お向ひの山田屋さんが先日からいろんなのを持つて來て見せるの。その中にこの位の」と、指て可愛らしく輪を造つて見詰めて、「そりやいゝのがあるの。私あればつかりは他人に賣らせたくはないわ。どうせ彼處へは一度にお金を拂はなくつてもいゝんだから……」

女の調子づいて喋舌るのを、香取は神妙に聞いてゐた。が、進んで女の喜びさうな返事をも與へなかつた。言葉が切れてからもじつと耳を澄ませてゐると、汽車の音が静かな空を破つて幽かに聞えて。長い夜ももう更けたかと思つて、自分の持つて來た銀側の懷中時計を見ると、まだ九時になつたばかりだつた。

「まだ眠くはないね。何か面白い話をして呉れないか。お前の惚氣でも聞  
いてやるよ」と云つて、彼れは次の間へ床をのべに來た女中に命じて酒を  
持つて來させた。そして二三杯ガブ呑みしてから女に猪口を差しして、面白  
い話をと迫つた。何かロマンチックな話とその艶のいゝ唇から洩れるや  
うにと望んだ。

「面白くも話つてどんなこと？」女は迫られるほど退避して、「面白いこと  
つて些ともないわ」

「ぢや、悲しい話でもいゝぞ。泣きたいやうな目に會たことぐらゐあるだ  
らう」

「え、それは幾度もあつてよ。だけど、そんな話したつて詰らない」  
「ぢや、僕が話して聞かせようか」

香取は素直な聽手に向つて、自分の昔からの戀物語をしたかつた。左程

でもない事にも色艶をつけて話して、聽手に自分と同じ感じを傳へたかつ  
た。さうして快い受答へをされれば、寂しい心も慰められて自から元氣づ  
く様に思れた、て、暫く心を凝らして過去を呼び起しながら、  
「かうしてお前と差向ひになつてると、他の女の顔が二つ目につくやうだ  
よ。どうしても僕の頭の底から消えないんだね。何だか其處にゐるやうな  
氣がするよ」と云ふと、

「何故？。變だわね」と、女は何の氣なしに自分の左右を見た。

「お前は一度思込んでた男でも、別れたら直ぐ忘れられるかい」

「そりや忘れやしないわ。本當に思込んだら忘れられるものぢやないわね」  
「女もさうかね。女の方が男よりは忘れっぽいやうな氣がするけれど…」

…僕はこの頃も戀しい女が一人あるんだ。その女よりやお前の方が艶が  
いゝし、齒並もいゝんだが」と、香取は其處にゐる女の顔と目に見えぬ女

の顔とを見比べてゐると、女は顔を背けて、

「厭だわ、そんなに見てゐちや」と、下卑た調子で云つた。

「まあ辛抱して大人しく聞いて、呉れ」と香取は頼むやうに云つて、眞面目で話出さうとしたが、

「ち惚氣ならもう澤山よ」と、女は手を振つて、浮薄な笑ひをした。

それを見ると、香取は急に興が醒めて、最早話をする氣もしなかつた。で、残つた酒を飲干してから、横になつて目を瞑つてゐた。

「貴下の顔は眞赤よ。眠いんでせう、もうち休みなさいな」女は側へ顔を摺寄せて云つた。

香取も寝るより外に仕方がないので、力なく立つて柔かい蒲團の中へ入つた。小菊は女中を呼んで、部屋を片付けさせてから、便所へ行つたやうだつたが、やがて歸つて來ると、「どの部屋も燈火が消えて、もう皆な寝て

るわね。東京には今時分寝てる家なんかありやしな」と、獨言のやうに云つた。

そして、暫くすると、「貴下、此方は濫かになつてよ」と、呼醒ます聲が香取の耳に入つた。が、彼れは返事をしないで、酒の氣を吹出しながら、闇の中に動いてゐる自分の心の影を追つてゐた。其處の寢床にゐる小菊の寢姿よりも、追分の家や、今見た向ひの部屋の新夫婦などが、いろ／＼に想像に浮んだ。で、彼れは絹夜具に包まれながら、矢張寢苦しかつた。

戸の外では佗しさに犬が長吠えをしてゐる。  
「よく眠てるのね」と、女は獨言を云つて欠伸をした。

翌朝女中が火を入れに来るのを待つて、彼れは寢床を離れた。鹽湯で温まつて二階に戻ると、温かい日が廊下に差込んで、頬に觸れる鹽風も氣持がよかつた。て、障子を開けたまゝ、磯の茅屋越しに穩かな海を見下しながら、今日の道順を考へてゐると、女は次の間でも化粧をしながら、土地の名所を訊いたり、煩さくち土産の相談をし、けたりした。

「日が短いから、ゆつくり見物は出來ないぜ 肝心な名所だけ見たら、江の島へ廻つて、今夜東京へ歸ることにしよう」と、香取は豫定通りに二三日を此處で送る氣にはとてもなれなかつた。

「そんなに早く？」と、女は意外に思つて、折角の旅だから今日延してはと、二言三言逆らつて見たが、逆らうほど男の決心は堅くなるばかりだつた。

さう極ると、一刻も無駄にするのが惜くなつて、女は急いで身装して、食

事をも手早く済ませた。

そして、向ひの新夫婦が俣を連れて出て行つた後で、二人は歩いて海岸の方へ向つた。濕つた細い道を通抜けて、浪打際へ出ると、香取は長谷から稻村ヶ崎へと、うろ覚えの名所を指差して教へた。女はそれよりも足許の貝殻を珍しがつて、氣に入つたのが目に付くと、立留つて拾つては手巾に包んだ。そして、驅出しては男に追付いてゐたが、次第に息が苦しくなつて、

「私足が怠くなつて轉びさうよ。少しの間休ませて頂戴な」と、男の手に絶り付いた。

「ぢや、僕が手を牽いてやらうか」と云つて、香取は足を緩めて連立つて陸へ上つたが、ふと氣付いて見てゐると、引摺つて内輪に歩んでゐる女の足取は弛慢がなくて、如何にも卑い勤めをしてゐる女らしかつた。顔はま

だ明るい日に曝らしても艶々しく見えたが、足取は色を賣るに疲れてゐる女としか思はれなかつた。

すると侮蔑の念がむら／＼と湧上つた。人目に睦じさうに歩いてゐると見られるのも厭だつた。て、通掛りの俵を呼んで、長谷まで急がせることにした。

大佛と觀音とを見て、直ぐに電車に乗つて江の島へ向つたが、彼れの心にはまだ電車のなかつた時分に、草鞋穿きて材木座の宿を出て、歴史で覚えてゐる名所古蹟に残らず立寄つて、汗みどろで七里ヶ濱を歩いたことが、四邊の景色を見るにつれて懐しく思出された。あの時分は星月夜の井で渴いた喉を潤ほし、力餅で饑を凌いだのだつたがと思ふと、女などに心を累されなかつた初心な昔が戀しくなつた。「何だ女なんかを連れてやがつて」と、藝者など引張つて見物してゐる男を見ると、竊に嘲つてゐた者だが、今

は彼自身に其嘲らるべき一人になつてゐる。

が、今の彼れにはそれを嘲るよりも、むしろこんな女でも道伴れにしたいほどに心の淋いのが悲かつた。

乗合せた客は少かつたが、土地の者らしい鐵漿をつけた中年増は、小菊の頭の髪から足の爪先までに目を注いで、やがて横目で男をも見下した。電車を下りると、藤澤の方からの電車も着いて、江の島行らしい客が四五人下りた。その中の小柄な年増を見ると、小菊は、「私の知つた人がゐてよ。困つちやつた」と、小聲で云つて、道を避けようとしてゐたが、先方が横目で此方を見てゐるので、急に笑顔をつくつて側へ寄つて、「あら、お師匠さん暫く」と、會釋した。

「おや」と、年増は今氣がついたやうな顔をして、「此頃は何方？」  
「ずつと遠方ですの」

二人は並んで歩きながら、何彼と話出したが、香取は一人離れて先へ進んだ。橋近くなつてから、小菊はやうく追付いて「あんな人に會つて厭になつちまう」と云つて、そつと後を振返つた。

「誰れだ、あれは」

「常盤津の師匠よ。私去年までお稽古に行つてたんですけれどね、そりや厭な人なの、後で屹度私のを連れの人に話しててせう。いゝ加減などを云ふ人だから」

「ぢや、お前に何か後目たいことがあるんだらう」

「あら、さうぢやないわ。私後目たいことなんかなくつてよ」と、女は目に力を籠めて云つた。

長い橋を渡つて、島へ着いた時分、最早正午を餘程過ぎてゐた。香取は岩屋まで坂道を上下するのが煩はしくて、「お前も疲れたやうだから、晩ま

てこの邊で休んで歸らうぢやないか、何處まで行つても同じやうなものだよ」と、女を説伏せて、眺めのよさうな宿屋へ入つた。女は足の疲れよりも、またあの年増に會ふのが氣になつて、話の種にと思ひながら、強ひて島巡りをしたがりもしなかつた。

七里ヶ濱が眞向うに見渡される二階の一室に落着くと、女は障子を開けて、今來た道を眺めながら、

「名所つてさう面白いのぢやないわね」と云つた。

「さうだとも」と香取も同意して、女の側に立つて、人氣のない小舟が二三艘波に揺れてゐるのを見下しながら、「お前なんか、こんな淋い所へ來るよりや、東京で芝居でも見てた方がよかつたらう」と云ふと、

「さうでもないわ。氣が清々してよ。誰れにも氣兼ねしないで、こんな土地で暮してたら、壽命が延びるだらうと私思つてよ」

「だけど、かう云ふ名所へ來ると、誰れか知ら知つた人に會ふぜ。日に一人ぐらゐはち前のち客が見物に來るだらう。今もあんな薄氣味の悪い婆さんに會つたし」と、香取は皮肉らしく云つたが、ふと思出したやうに「前は三味線が巧いんかい。一度も聞かなかつたが」

「私些とも彈けないの」と、女は早口に空々しく答へたが、やがて火鉢の側に坐つて、「藝者になる前から、常盤津は随分習つたのよ。厭てく仕様がなかつたのに、お母さんに責められて、無理にお稽古に行かされてたのよ」

「ぢや、お前を初めから藝者にするつもりだつたのかい」

「どうでもないわ。だけど、私お稽古してよかつたの。身に藝がなかつたら、今時分どんなになつてたか分らなかつたんだけど」と、女は獨りて何か感してゐた。

この女にも秘密があるのかと思ひながら、香取は愈屈凌ぎに女の生れた土地や親兄弟のことを訊いてゐたが、少しも興は湧かなかつた。そして、一日の旅も長く東京を離れてゐるやうで、留守中に異つた事でも起つてゐるやうに思はれてならなかつた。で、食事を済ますと、直ぐにも歸りたがつて、「かうしても話もないし、矢張東京がいゝね。やまとへ行つてお前の三味線でも聞く方がいゝよ」と促すと、

「さう。ぢや今夜は彼家へ泊つて入つしやい」と云つて、女も快く應じて歸仕度をした。

宿を出ると、土産にいろんな貝細工を買つたが、その量張つた包は香取自身の手で提げた。女は流石に心残りのされるのか、兎もすれば島の方を振返つて、見残した所を男に訊いてゐた。

「今度誰れかに連れて來て貰つた時に緩くり見物するさ」と云つて、香取

は道を急いで、藤澤から汽車に乗った。そして、汽車の進むにつれて、今まで見てゐた景色は、次第に頭の中に薄らいて、東京の知人の顔が濃く浮んで来た。

新橋に著くと、最早周囲は夜だった。底冷い風が頬に染んで、温い飲料と火鉢が戀しかつた。で、彼れは電車で直ぐに歸らうとしたが、女は寒さうに身體を縮めながらも、何かと銀座で買物をしたがつた。「やまとの姉さん」に何か買つてやらなくちや悪いわね」と、謎を掛けるやうに云つて、氣の利いた品物を考出した。

「其より前の手が冷やうだから、手袋でも買つといつて」と云つて、香取は仕様事なしに女に紙幣を渡して、自分は懷手をしながら、天下堂の前に風に背いて悄然立つてゐた。そして、あまり手間取るので、其處等の店先を覗きながら行戻りしてゐたが、何を見ても自分に買ひたいと思ふ程の慾

は起らなかつた。目を凝らして品物を選分てゐる客の顔付が不思議に見えた。

「お待ち遠様」と、待ちあぐんでゐる所へ女は出て来て、悦しうにして、「此處には何でもあるのね。私迷つちやつた」と云つて、再び貝細工の包を男に持たせながら、「残つたお金で貴下のお金入れを買つたんですよ。あんまり汚れてゐる見つともないから」と、出して見せたさうにしたが、香取は押留めて直に電車に乗つた。

女が勢ひづいた聲をして、やまとの格子戸を開けると、駆け出た女中はあまり早いのに驚いて、「面白かつたてせう」と云ひながら、意味ありげに二人の顔を見比べた。

「よく歩いたのよ、休む間は些ともなかつたの」と、小菊はさも疲れたやうに云つて、見た事聞いた事を誇張して、留度なく話出した。「此方はかう云



つたの、あゝしたの」と、男の方を目差して、さも睦じかつたらしく、女中の前で噂したが、それが香取の耳には全然他人事のやうに聞えた。

やがて彼れは其家の風呂に入ったが、その間に小菊は家から持つて來させた黒い襟の懸つた衣服に着替て、氣樂さうに女中を相手に旅の話をして笑つてゐた。

「鳥でも取つて呉れ。食事して今日は早く歸るんだから」と、香取は風呂から出ると、直ぐに云付けたが、女は睨むやうな目付をして押留めて、「姐さん緩くりていゝんですよ」と、側の女中に云つた。そして、自分の家の半玉を二人呼ぶやうにと男に強請んだ。

「ぢや、お前の好きさなやうにするさ」香取はどうせこの後滅多に來るのではなしと、さして争ひもしなかつた。

でも、心置きなく落着いて遊んでゐやうとはしないで、見榮えもしない

半玉を前に置いて、一緒に食事をしてから、遅くならぬ間に家へ歸つた。

下女は戸締りをして、行火を入れて寝てゐた。長く家を空けてゐたやうな氣がしたので、何か異つたことはなかつたかと、茶の間から座敷を注意したが、家の中は出て行つた時のまゝだつた。座敷の火鉢には煙草の吸殻が汚く亂れてゐる。

「誰れも來なかつたかい」と、火種を持つて來た下女に訊くと、

「いゝえ、誰れも來ません」と、下女は何時ものやうに素氣なく答へて、蒲團を敷いて行つた。

香取はまだ眠くはなかつたが、机の前に坐つてゐても果しがないので、間もなく冷い夜具の中へ藻線込んだ。そして、目を瞑つて興のなかつた旅中の事を思出してゐたが、すると、一緒にゐた間よりも、やまとから歸つた後の小菊の有様が一層心に留つた。今時分何處へ行つてゐるだらうと、想

像まがされて厭いやな氣きがし出した。わざ／＼旅たびへ連れて行いつて、氣き儘ままをさせて置おきながら、歸かへつて來きると、その女おんなはその夜よから外ほかの客きやくに呼よばれてゐるのに氣き付つくと忌いましくなつた。これまでは、やまとの格子かうしど戸どを出でると、女おんなの身みの上うへなどは直すぐに忘わすれて、些ちしも心こころの蟻あだかまりにはならなかつたのに、今夜こんやに限かぎつて不思議ふしぎに枕まくら許もとに影かげを差さした。

て、「もう二度にどと彼女おんなは呼よばない」と、心こころの中うちで憎にくむやうに云いつて、その姿すがたを搔かき消けすには可か成なりの時ときが掛かつた。

## (十四)

翌日あしたから香か取どりはまた暫しばらくく沈ちん黙もくの日ひを續つけたが、お多た代たから幾いく日かも消息たよりのないのが不安ふあん心しんで、日ひ々々そればかりを待まち設まけてゐた。湯ゆ原はらの目めに觸ふれるの

が氣きになつて、此方こちらからは立た入いつて手紙てがみを出だ兼ねたが、女おんなの方ほうで自分じぶんを輕かろんじてゐる筈はずはないのに、何なにも知らせて來こないのは變へんだと思おもはれた。すると女おんなの體たいに若わしや異い情じやうでも起おこつてゐるのではなからうかと案あんぜられて恐おそろしくなり出した。湯ゆ原はらの勸すすめには従したがはないと云いつてゐたが、萬ばん一いつどうしたか分わかりやしない……

て、様子やうすを見極みめて來こようと思おもひながら、痛いたましい女おんなの身からだ體たいを見るのがいぢらしくて、一日いちにち々々々躊躇ちゆうちゆうしてゐると、或ある朝あさ湯ゆ原はらが訪たつねて來きた。矢張やはり不ふ斷たんの通とほりの脂あぶら切きつた顔かほをしてゐて、瘦やせてもゐなければ、神しん經けいを疲つからせてゐる風ふうも見みえない。

どんな事ことをしてゐても、心こころの訶こいまれず肉體にくたいの磨すり滅めつらされないこんな男おとこを見みると香か取どりは羨うらやむよりは、小憎こにくらしく思おもつた。

「この頃ころ追お分の家うちではどうしてゐますか」と、彼かれは相あ手ての言い出だすのを待まち

兼ねて訊いた。

「相變らずだらうね」と、湯原は冷淡に答へたが、やがて微笑しながら「一寸寄つて見ようと思つてるんだが、どうだ、君も一緒に行つちや。僕の家よりや彼家の方が氣樂でいいだらう」

「え、」香取は黙つて考へてゐたが、たとへ厭な思ひをしようとも、いつそ湯原に随いて行つて見ようかとも思つて、「行つてもいいんだが」と曖昧に答へて、「しかし、何時までも彼家に置いとくんですか」

「當分仕方がないが、あれて甘く落着いて行きさうだよ。妙なものだ。こんな無事に濟むものなら、何も初めから慌てなくつたつてよかつたのださ」

「ちや、貴下の家ではもう波瀾は起らないんですね」

「波瀾どころぢやない、天下泰平さ。今少し、たら僕の遣口を詳しく話してもいいが、僕は何をやつても家庭の平和だけは亂したくないからね」と、

湯原は誇り顔で云つたが、ふと言難さうにして、「それについて君に折入つて頼みたいんだが今月中幾らか立替へて貰へまいかね。この頃餘分の収入がないから、家内に秘密で融通することが出来ないので困るよ。どうせ近に年末賞與があるんだから、決して迷惑を掛ける氣遣ひはないんだが、どうだらう？」

その謙遜した言葉を香取は直ぐには斥けかねた。此方の懷中に多少の餘財のあることを見抜いてゐるし、以前の關係を腹に持つてゐるのだと氣付くと、穩かに頼みを斥ける口實は見付かりさうでなかつた。て、迷惑さうにして、分明した返事をしないでゐると、湯原は只の五圓でも三圓でもと、次第に價下げをして、「實は今日明日と差迫まつてるんだが」と、相手の同情を求めるやうに云つた。

「僕は今幾らも持つちやるないんですよ」と、香取は不承々に机の引出

から、小菊の買つて呉れた墓口を取出して、湯原の目の前で開けて見せて、その中から欲しいだけ採取させた。

「皆借りる譯にも行かないね」と、湯原は照隠しに微笑しながら、中の物をそつと引出して、「洒落た墓口だ」と、口金の音をさせて面白さうに眺めてから、机の上に返した。

「高い墓口だからね」と、香取は呟いたが、湯原はそれを耳にも留めず、「君も行くかね」と誘つて、もう浮腰になつた。

強ひて勧める風はなかつたが、香取は二人の様子を見たくもあり、自分一人家に取残されるのも忌々しくて、一緒に家を出た。そして、途中であまり話をせず、二人別々の思ひに耽つてゐたが、追分に近づいた時分、ふと、

「貴下は心から彼の女と分れる氣になつてゐるんですか」と、香取は眞面目

に訊いた。

「さうだとも。何故？」湯原は足を緩めて側へ寄つて来て、「つまりは別れるより外に僕としていゝ方法はないぢやないか。君のやうに獨身ぢやないんだからねえ……僕も今まで獨身だつたらよかつたかも知れないよ」と、笑ひに紛らせて「僕も可成り道樂をしたけれど、一度も信用を無くするやうなことはしなかつたからね。今でもそれだけは注意してるよ。」

「しかし、男女の關係がさう簡単に片付くものでせうか。何方にも傷がつかないで済みますかね」

「そりや當人の量見次第さ。だけど大抵は綺麗に收まつて行くらしいね。僕など一體混付くのが嫌ひだから、何時も後先見ずの無分別はしないんだが、人間にはつい魔が差すことがあるんだよ」と云つて、湯原は何か感じたらしく、「最初僕の方でどうしよつて氣は些ともなかつたのに、自然にさう